

---

# 謎の転校生は・・・・・・・・

音無 奏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

謎の転校生は……………

### 【Nコード】

N9829S

### 【作者名】

音無 奏

### 【あらすじ】

ある日、並盛中に転校してきた雪風麗は、なんとリポーンのしりあいだった。リポーンに“雪の守護者”になれと言われた麗。最初は心を閉ざす麗であったが、だんだん沢田綱吉ひきいるボンゴレファミリーに心を開き始める。ただ、麗には1つ誰も知らない秘密があった。

## 標的0 まえおき(前書き)

はじめまして。音無奏です。小説を書くのは初めてなので文章がおかしかったり、誤字・脱字があると思います。そのときはおしえてください!!

標的0 まえおき

だれもわたしをしんじないで・・・

おねがいだから、やさしくしないで・・・

いずれはあなたたち、いえ、わたしとかかわったすべてのひとたちをうつらぎることになる・・・

わたしとかかわったことをこうかいつるときがくる・・・

なぜって・・・？

その理由はかんたん。なぜならわたしは・・・

呪われた子だから！！

場所は並盛。わたしゆきかぜ雪風麗れいと沢田綱吉が出会ったときからこの物語は始まる……

標的0 まえおき(後書き)

いやあー 読みにくい文章でごめんなさい>m) ( m <  
実はわたしは受験生でしてなかなか投稿できないと思います・・・  
さて、いよいよ次回からツナヤリボーンが出てくるわけですが、ど  
ういう風に書こうか迷っています。

読んでくださった方ありがとうございます!!!! 次回もお楽し  
みに(\*^\_^\*)

## 標的1 出会い(前書き)

前は、初めての投稿で行の開け方など下手でスミマセン」( ) .  
— )

できるだけ読みやすいよう頑張りたいと思います!!

## 標的1 出会い

side 沢田綱吉

「はぁー」

リボーンと出会って1週間ろくなことがないよ・・・

京子ちゃんには告白のこと冗談だと思われてるし、獄寺隼人とかっていう転校生にからまれるし・・・ もうやだよ

それに、リボーンっていう変な赤ん坊がオレをマフィアのボスにするとかっていうし・・・

ボスってなんだよ 意味わかんねえ

まあ、リボーンのおかげで京子ちゃんと友達になれたし、みんなからダメツナっていわれなくなったからいいけど・・・

いや、よくない



とか考えてるうちに学校に着いた

獄寺「おはようございます 10代目!」

きた〜 オレを悩ます原因の一つ

ツナ「おっ おはよう」

京子「おはよう、ツナ君」

朝から京子ちゃんと話せるなんてラッキー

ツナ「おはよう! 京子ちゃん」

京子「ねえ、ツナ君。今日私たちのクラスに転校生がくるんだって」

ツナ「えっ、そうなの。どんな子かな?」

京子「楽しみだね」

S i d e 獄寺隼人

京子「今日私たちのクラスに転校生がくるらしいよ」

この時期に転校生か・・・めずらしいな

もしかしてマフィア関係か？ いや、そういう情報はない

もしそうだとしてもオレは10代目を命にかけてお守りする  
だけだ

それにしても10代目、笹川京子と話をしているときはとて  
も楽しそうだ

それに比べておねは・・・ 10代目のお役にたっている  
んだろうか？

獄寺君相変わらずこわそうだな・・・

京子ちゃんは相変わらずかわいいな

獄寺君は怖いけど、こうして教室で話せる人がいるっていいな・・・

先生「みんな、席につけ」

先生の声であわてて席につく

先生「ちゃおっす」

(リッ、リポーン!!)

獄寺「リポーンさん、なんでここに・・・!!」

リポーン「ごちゃごちゃうるせーな」

ヒュッ

バキッ

ツナ「うっ 獄寺君」

(リボーンがチョコクを投げるとこんなになるの・・・)

リボーン「転校生がきたので紹介する。こい」

カツ      カツ      カツ

静かな足取りで教室に入ってきたその子にオレは目を奪われ  
てしまった

肌は雪のように白く、髪はきれいな茶髪だった

澄んだ緑色をした目は、つい見とれてしまうような魅力的な  
めだった

(きれいな人だな・・・)

転校生「はじめまして。 雪風麗です」

リボーン「席はダメツナの後ろだ」

カツ

カツ

カツ

ごく普通の転校生、雪風麗。その子がオレの横を通ったとき何か違和感を感じた。誰も寄せ付けないっていうか、とにかく周りの子とは違う感じがした。

オレはこのとき雪風麗と出会ったことでオレと後に集まるボンゴレファミリーとその関係者の運命を大きく変えたことなどに気が付きもしなかった・・・

## 標的 1 出会い（後書き）

やっと標的 1 が書けました。

私はつつのが遅いので短い文章でも時間がかかってしまいます・・・  
・ >、く、く <

だれか、早くうつてるこつがあれば教えてください（TOT）ノ

今回は、麗とリボーンの会話を入れてみたいと思います

お楽しみに

## 標的 2 観察

side 獄寺隼人

なんだこの女。なんの感情も無いしやがって。いってー何考え  
ているのかわかんねーや

だけど、あの目は何だ？

何かを鋭く観察しているような目は・・・タダものじゃねえ

この女、気を付けねえと・・・



麗「はじめまして。雪風麗です」

（あれが沢田綱吉・・・聞いていた以上に頼りなさそうだ）

リボーン「席はダメツナの後ろだぞ」

自分の席まで歩いて行くとき沢田綱吉に一瞬、なにか悟られたように思えたが気のせいだろう

あいつに超直感があるとは思えない

それより、何を理由にあの人は私をここに呼んだのだろうか？

ツナ「あのっ・・・えっと・・・」

麗「何」

ツナ「えっと・・・とろしく」

麗「それだけ？」

ツナ「・・・」

私が冷たい目でみると沢田綱吉も気を悪くしたのか前を向いた

休み時間などいろいろな人からの質問ばかり受けたけどすべてスルーした

嫌な人に見られたと思うけど別にそんなことはどうでもいい

それより、なぜこんなところに私を呼んだかだ

頼みたいことがあると言って呼びだしたくせに詳しいことを話さずいきなりこんな・・・

納得がいかないのを私を呼んだ張本人のところに行くことにした

麗「いきなり呼び出してどういうことよ・・・」  
リボーン

リボーン「ちゃおっす」

---

side リボン

麗「リボン、一体どういうこと」

部屋に入ってくるなり冷たい目でオレをにらみつけながら言った

リボン「ちゃおっス」

麗「ちゃおっスじゃないわよ。いったい何を目的に私をここに呼んだのよ」

リボン「それより、沢田綱吉はどうだ」

麗（話を覚えてきたな・・・）

「運動・勉強すべてが最悪。周りのみんなからはあまりのダメさにダメツナと呼ばれている。家族構成は母親とリボンとの三

人暮らし。父親は現在どこにいるのか分からず。というぐあいかしら」

リボン「よく調べたな」

麗「あんな奴がボンゴレ10代目となるのか？私はふさわしいとは思わないけど・・・」

ボンゴレといった大きな組織のボスになれるはずがない」

リボン「それはわからねーぞ。今からオレが立派なボスに育てるからな」

麗「そう。そんなことより私を呼んだ目的を教えなさいよ」

やはりそこを聞いてくるのか・・・

麗にごまかしはきかないようだな。ここは正直に言うべきか・・・

リボン「麗、おまえには？雪の守護者？になってもらう」

---

s i d e 雪風麗

麗「……………今、なんていった」

リボーン「おまえに雪の守護者になってもらう」

麗「私が……………」

リボーン「ああ。そのためには10代目のボスとなる沢田綱吉のことを知ってもらう必要がある。

だからお前を呼んだ」

麗「……………」

なるほど……………。リボーンがなかなかわけを話したがらないわけだ

それにしても、私が雪の守護者に・・・

リボーンの考えていることが分からない

麗「私は嫌よ。確かにボンゴレは大きいマフィアだけれど、ボスがあんなに弱いのは例外よ。雪の守護者なんて引き受けるつもりはないわ」

リボーン「なら、今後優秀な守護者を集め、ツナを立派なボスにすれば引き受けてくれるんだな？」

麗「私が認めるようならね」

リボーン「その言葉忘れるなよ」

こうして私は沢田綱吉やその守護者を観察することになった

## 標的 2 観察（後書き）

ご愛読ありがとうございます！！！

受験生ということで今後投稿は毎週日曜日になると思います

遅くてすみません

### 標的3 観察日記1（前書き）

今回は、麗中心で書いてみました。



### 標的3 観察日記1

#### 1日目

今日は、理科のテストが返された。沢田綱吉（以下沢田）を見るに全然できていないらしい

（顔が蒼いから・・・）

獄寺隼人（以下獄寺）はまだ学校に来ていない

沢田が名前を呼ばれた

先生「あくまで仮定の話だが・・・」

この根津という先生は、自分がエリートコースを歩んできたからといって点数の低い生徒をいじるらしい

沢田みたいなやつを・・・

沢田が顔を赤くしながら席に着くと、ちょうど獄寺が教室に入ってきた

獄寺「おはようございます、10日目」

根津「コラッ、遅刻だぞ！！ 今頃登校してくるとはとうとうもりだ」

獄寺「ああー！！」

根津「うっ・・・」

獄寺はガラが悪い

これじゃマフィアというよりやくざだろう

でも獄寺は頭がいい。実際100点取ってたし・・・

休み時間沢田と獄寺が校長室に呼びだされた

15年前のタイムカプセルを見つけないと退学になるらしい

私は教室から校庭に出てきた沢田たちを観察した

獄寺はダイナマイトを使って校庭を爆破している

いくらなんでも一般の人の前でやりすぎなのでは・・・？

沢田のほうはリボーンに特殊弾を打たれ死ぬ気モードになっている

ツナ「死ぬ気でダウジング!!!」

生徒「ダメツナ、またパンツ一丁だぞ」

生徒にまたばかにされている。こういう人がボスでいいのやら・

ツナ「地脈発見。ここを割るうう!!!」

リボーン「肩・肘・腕の3連コンボでメガトンパンチ弾。

脊髄直撃で耐熱ヒフ弾だ」

麗「リボーン、いつのまに・・・」

リボーンはいつの間にか教室に来ていて、沢田に特殊弾を撃つていた

リボーンもやりすぎだと思ふときが多いな・・・

ツナ「うおおおおお」

ドンっ

ガッ

生徒「じつ地震？」

生徒「いったい何が起きてるの？」

根津「獄寺と沢田だな！！グラウンドで何をしているか！！

即刻退学決定……」

獄寺「おい、15年前のタイムカプセルは見つからなかったが、  
かわりに……」

どうやらかなり昔のタイムカプセルを見つけたらしい

その中に、根津の昔のテストが出てきて根津が焦っている

後で聞いた話、根津は学歴詐称で解任されたらしい

もちろん、沢田と獄寺の退学処分は取り消しになった

## 2日目

男子は外で野球をしている

だけど、獄寺は学校に来ていない

外では沢田をチームに入れるか入れないかもめている

あれっ・・・見覚えのある奴がいる・・・

確か山本武だ。リボンがファミリーに入れたがってたな・・・

おっ、山本武（以下山本）が沢田をチームに入れてくれたようだ

先生「おい、雪風。この問題を解いてみる」

麗「 $X \parallel 3$ 、 $Y \parallel 7$ です」

先生「正解だ。では、次の問題を解いてみる」

麗「 $X \parallel 0 \cdot 5$ 、 $Y \parallel 2 \cdot 7$ です」

先生「うっ・・・正解だ。では、この問題の答えは・・・」

ずっとこの繰り返しだった

おかげで沢田と山本の観察ができなかった・・・

クラスにたまっていた男子に聞くと、沢田のせいでチームはぼろ負けし、沢田と山本の2人でグラウンドの整備をしているということだそうだ

今日はこれといった問題はなかった

### 3日目

登校してきたら教室に誰もいなかった

リボン「ちゃおっす」

麗「リボン、みんな屋上に行っているが何かあったの？」

リボン「山本が屋上から飛び降りようとしているぞ」

麗「そうなの。それで沢田は屋上に？」

リボン「ああ。今から俺も行くところだ」

こうして私たちは屋上に行った

そこにはたくさん生徒が集まっていて山本を止めようとしていた

対する山本は片腕を骨折していて深刻な顔をしていた・・・今にも飛び降りそうだ

リボン「・・・・・・・・・・」

麗「ちょっとリボン、どこに行くのよ」

リボン「・・・・・・・・・・」

リボンが答えてくれないのでついていくことにした

三階に降りるとリボーンはちょうど山本たちがいる下あたりに立  
った

麗「山本のこと気に入ってるの？」

リボーン「まあな。殺し屋になるセンスがあるぞ」

そんな話をしていたら屋上から悲鳴が上がった

山本と沢田が落ちてきた。・・・やばいことに沢田と目が合っ  
てしまった

リボーン「今こそ死ぬ気になるときだぞ」

ズガンッ

ツナ「空中復活リ・ボーン!!」

リボーン「追加弾だ」

ズガンッ

ツナ「つむじがかゆい、かゆーい」



リポーン「つむじを撃つと、つむじ育毛スプリング弾だ」

麗「そんな解説はいいから」

下を見つめるに沢田と山本は助かったみたいで、2人とも仲良く  
なっただよう

リポーンはファミリーをゲットしたと思っている

たしかに山本の運動神経の良さ与人望の高さはファミリーにとっ  
ていいけど・・・

野球一筋っていうのがね・・・

まあ、とりあえず今日のリポーンの機嫌は良かった

それより、沢田になんて言い訳をしようか・・・

### 標的3 観察日記1（後書き）

そろそろ私は職場体験というものがあっているいろいろ忙しいです・・・

部活も大会が近く、生徒会もいろいろあって・・・

話を書くを早くしたいのですが・・・

まあ、頑張りたいと思います!!!

## 標的4 疑惑

Side 雪風麗

今日も学校終わったなー

沢田の観察を始めて一週間。山本はバカだけど運動ができてしかも性格がいいので男子と女子にかなり人気がある。

ひどい  
獄寺は女子には人気があるが相変わらず性格が悪い。というより

沢田のほうは・・・言わなくてもわかるだろう

これからどうなっていくのだろうか？リポーンは沢田をボンゴレのボスに育て上げることができるのだろうか？

雪風麗とかつていう転校生が来てから一週間。なんかいつも見られてるって気がするんだけど・・・

気のせいかな？

それに、山本と屋上から飛び降りたときリボンと一緒にいたよ  
うな・・・

まさかマフィア関係ではないよね・・・？

でも、リボンの隣にいたってことは・・・もうわけわかんないよ  
とにかく疲れた。家に帰って寝よう

とぼとぼ歩いているとなんとリボンと雪風さんの2人がいた

しかも、何か話しているみたいだけど・・・

えっ・・・どういふこと？

散歩をしていたら下校中の麗に会った

リポーン「ちゃおっす。どうだ、雪の守護者を試してみる気にはな  
ったか？」

オレがそう聞くと麗はあからさまにいやな顔をして言った

麗「守護者の山本はまだいいわ。でも獄寺と沢田は問題外。今の  
ままじゃ絶対に引き受けないわ」

リポーン「そうか。でも、ツナの成長はまだまだこれからだぞ」

(やっぱりまだ引き受けてくれないか)

ツナは相変わらずやる気がないしな・・・

何かツナをやる気にさせる出来事があればいいんだが・・・

そんな事を思っていたらちょうどツナが通りかかった

ツナも俺たちのことに気づいてこっちを見ている

リポーン「おい、ダメツナ。何ボケっとしてるんだ」

麗「いつの間にそこに……」

ツナ「えっ、なんでリボーンと雪風さんが一緒にいるの?」

リボーン「それはな、麗に雪のしゅご……」

麗「あつ、こんにちは沢田さん。えっと、この赤ん坊と知り合いなの?」

ツナ「えっ、そっそうだけど……」

麗「そうなんだ。なんかこの子道に迷ってるみたいだったから。よかったねリボーン君」

リボーン「何言ってるんだ。オレはお前を雪の「それじゃあ沢田さん、あとはよろしく」」

全く麗のやつ話をごまかしやがって

動揺してるのばればれだぞ

ツナ「なあ、リボン。雪風さんとはどういつ関係なんだよ」

まあ麗が雪の守護者になることは後でツナにも言わなきゃいけないことだからな。報告は後でもいいか

リボン「さっき麗が言っていた関係だぞ」

ツナ（絶対嘘だ・・・）

ダメツナのやつ考えていることがばればれだぞ。まだまだ修行が足りないな

オレはリボーンがあんなことを言っていたけど嘘だと思う

だって、リボーンは雪風さんのこと麗って呼び捨てにしていたし、それに雪風さんは最初オレが見たときはリボーンと普通に喋っていたのにオレが声をかけてから焦っていたし・・・

なんかおかしいんだよね・・・

---

s i d e 雪風麗

いつの間に沢田がいたんだ？

リボーンのやつ気付いていたのにわざと教えなかったな

絶対私あやしまれたよね？

絶対に雪の守護者なんてなりたくないのに・・・



雪風麗と沢田綱吉がかかわった次の日から今後のファミリーになるべき人や沢田綱吉の支えとなる人たちが次々と現れることになる  
とはまだ誰も知らない・・・

#### 標的 4 疑惑（後書き）

いやあー文章短くてすみません

なかなか戦闘シーンまでいかないのですがこれからいろいろなキャラが出てくると思います

どうかあきずにご覧ください

**標的5 毒サソリ・ヒマンキ(前書き)**

今日の更新遅くなってすみません

## 標的5 毒サソリ・ヒアンキ

Side 沢田綱吉

季節は夏

ツナ「今日も暑いな。のどかわいた」

オレがそんな独り言を言っていたら・・・

チリン チリーン

(ママチャリにゴーグル!?)

なんとも不思議な人が来た

その変な人が俺の前でママチャリを止めるとヘルメットをぬいだ

(わっ・・・きれいな人・・・ハーフ・・・?)

不思議な人「よかつたらどうぞぞ」

そう言ってオレに缶ジュースを投げってきた

ツナ「うっ、うわっ!!」

ゴンッ      パンッ

(いって・・・取り損ねた。めちゃめちゃかっこわりー)

缶ジュースの中身が落ちた衝撃でこぼれてる

あれっ・・・こぼれたジュースからなんか変なけむりがでてきてる・・・

ガッ

ツナ「えっ・・・」

ドサッ

(上からなんか落ちてきたー)

よく見たらカラスだった

ていうかなんで上から落ちてきたの!?

まさか・・・この缶ジュースの中身って・・・

ツナ「リボーン大変だ！！外！ジュース！鳥が！」

リボーン「んっ？」

ツナ「んぎあああ」

オレが今までのことを言おうとリボーンのところに行くとなんと  
リボーンの顔にたくさんのカブトムシがくっついていた

何？樹液分泌とかしてるの！？

リボーン「子らは夏の子分たちだぞ。情報を収集してくれるんだ」

ツナ「何？虫語話せるの？」

リボーン「ビアンキがこの町に来ているそうだ」

ツナ「ビアンキ・・・？誰だよそれ」

リポーン「昔の殺し屋仲間だ」

ツナ「なんだってーっ!!」

ということはまだマフィア関係者が増えるの〜!!

ピンポーン

?「イタリアンピザです・・・」

ピザ?そんなのたのんだ覚えはないけど・・・

?「おまたせしました。あさり<sup>ボンゴレ</sup>ピザのお届けです」

ツナ「きつ君はさっきの!!」

?「召し上がれ!!」

そう言って今朝会った不思議な人はピザのふたを開けた

ツナ「んがっ……くっ 苦しい……」

なんだこれ……うまく息ができない……

リポーン「ちゃおっす、ビアンキ」

ビアンキ「リポーン!!」

何なんだよさっきの缶ジュースといい、今のピザといい……

っーかなんでオレが殺されかけてんのー!?

ていうかりポーン今この人のことビアンキって呼んだ!?

ビアンキ「リポーン、むかいら来たよ。また一緒に仕事しよう」

えっ、一緒に仕事……

リポーン「オレにはツナを育てる仕事があるから無理だ」

ビアンキ「かわいそうなりポーン。この10代目が不慮の事故か



何かで死なない限りリポーンは自由の身になれないのね」

何？それでオレを殺そうとしてたの？！考えかたおかしいだろ  
！！

ビアンキ「とりあえず帰るね。10代目をころ・・・10代目が  
死んじゃったらまたむかえに来るから」

ツナ「何言っちゃってるのあんた」

いったい何なんだよビアンキっていう女は・・・

リポーンに聞けば毒サソリビアンキっていうフリーの殺し屋だっ  
て言うし、その人の作る料理はすべてポイズンクッキングっていう  
毒入りの食い物になるっていうし・・・

またオレのところに変なの来たよ

ここでオレは1つ疑問に思った

ツナ「そういえばリポーン、あいつに気に入られてるっぽいよな  
」？」

リポーン「ビアンキはオレにゾッコンだぞ。付き合ってたことも

あるしな」

ツナ「はあ！？あの女がお前の彼女だったってこと・・・？」

リボーン「オレはモテモテなんだぞ」

こんな赤ん坊がモテモテなわけないだろ

リボーン「ビアンキは愛人だ」

ツナ「おまえ、意味わかって言ってるのかー!!」

何言ってるんだよ。愛人って軽く言っちゃって・・・しかも4番目  
ってなんだよ

本当にませた赤ん坊だよな・・・

---

side ビアンキ

時期ボンゴレ10代目、沢田綱吉。はじめてあったけどあんな奴  
にリボーンをとられた何て

絶対にリボーンは取り返してみせるわ

どうしたら沢田綱吉を殺せるかしら・・・

そうだわ・・・ポイズンクッキングをもっと改良してああすれば・  
・

よし!!それでいこう!!

待ってて愛しのリボーン

---

次の日・・・

---

side 沢田綱吉

京子「おはよう、ツナ君」

ツナ「おはよう、京子ちゃん」

あさからついてるな

京子「今日、家庭科でおにぎり実習があるんだ」

ツナ「へ〜」

チリン　チリーン

ビアンキ「人の恋路を邪魔するやつは毒にまみれて死んじまえ」

うわっ　またママチャリできてるよ

それより、周りのオーラかとても黒いんだけど・・・

ビアンキ「どござ」

ポイツ

ツナ「ダメえ!!!」

ビアンキの奴また変な缶ジュースを投げてきて・・・京子ちゃん  
までまきこむ気か？

ああ、これからこんな調子で人生歩んでいかなきゃいけないのか  
な・・・

---

s i d e    リボーン

ダメツナの奴まだまだ修行が足りないな

オレがこんなに近くにいるのに気付きもしないんだからな

ちなみにビアンキはこれからダメツナが経験していくのに比べたらほんの序の口だぞ

それにしても、ほかの守護者はどうしようか・・・

---

S i d e 雪風麗

今日の家庭科おにぎり実習じゃん!!

どうしよう・・・私、料理なんてできないのに・・・

早めに行って練習しようかな・・・

---

S i d e 獄寺隼人

そういえば、最近オレの出番がないよな？

10代目とあんまししゃべんないし・・・

おい！！音無、もっと出番を増やせ！！

山本「それについてはオレも同感だな」

獄寺「野球バカは黙ってる！！」

？「まあまあ、落ち着いて」

獄寺・山本「だれだ！！」

？「この小説の作者の音無です。（自分の小説に出てきていいのかわかりませんが・・・）今後のストーリーのことですが、なかなか獄寺と山本を出す機会はないですね。どうしてもツナや麗を中心に書いてしまいます。獄寺・山本ファンの方々、申し訳ございません。しかし、これからはいろいろなキャラが出てきます」

山本「そういうことなら仕方ねーな」



獄寺「そーいえばよ、転校してきた雪風つつのはいつてー何者なんだ？

あいつの過去はどうなってるんだよ!？」

音無「そこらへんについては今後のストーリーに入れていくのでお楽しみに。

それではさようなら

獄寺「ちえっ。雪風麗についての情報をあまり聞けなかったぜ・  
」

山本「まあまあ、そんなカッカすんなよ」

獄寺「うるせー。覚えてろよ音無。ぜってーオレと10代目との場面を多くしろよ!！」

標的5 毒サソリ・ヒアソキ(後書き)

今日は弓道の審査があつてとっても疲れた

でもなんとか間に合わせる事ができました

## 標的6 弱点(前書き)

いよいよ、私の大好きなキャラが登場します

しゃべり方などとても難しくけっこう迷ってました・・・

## 標的6 弱点

sideリボン

今朝、ツナと別れてから深刻そうな顔をした麗に会った

リボン「ちゃおっす」

麗「……………」

リボン「どうしたんだ？深刻そうな顔をして」

麗「……………」

リボン「そういえば、京子が家庭科でおにぎり実習があると言っていたな。おまえ、料理できないだろ」

麗「……………」

リボン「いつまでも無視してんじゃねーよ」

麗の態度にむかついたからキックをくらわした

麗「いった」

いつもよけるはずの麗が直撃を受けるなんて・・・そうとう困ってるな

おっ、学校に忍び込もうとしてるのはビアンキか

どつちやら面白いものが見れそうだな・・・

私は正直リボーンに凶星つかれて困っている

リボーンは絶対に人の弱点をいじるからな

だからと言ってごまかしはきかないだろうからな

と考えているうちにリボーンのキックが飛んできた。反応が遅れてよけきれず直撃した

麗「いつたいな」

やっぱりここは本当のことを話すべきかな・・・後からがめんどいし・・・!!

リボーンの奴笑ってやがる!!

絶対何か変なことを思いついたな

リボーン「それじゃあな。オレは用事を思い出したんで先行くからな」

用事というより暇つぶしだろ

とにかく家庭課室に行こう

家庭課室にて・・・

えーと、必要なものは炊飯器にしゃもじ、皿にラップにえーと米と具材、洗剤にスポンジ、タオル!!よし、OK!!

最初は米を洗うんだよね

ざるに米を入れて洗剤を大さじ一ぐらい入れてよく洗う

あれっ？泡がたくさん出てきた。きちんと洗い流せば問題ないよね!?

炊飯器に水を入れてスイッチオン!

具は何にしよう・・・ツナマヨにこんぶ、あんこにバナナでいいかな？

あつ、ごはんが炊けた。炊飯器のふたを開けるとごはんは洗剤のいいにおいが・・・

よしっ、ラップにごはんをのせて具を入れて三角にぎれば完成!!

ガラガラ

？」「キミ、こんなところで何してるの？」

こっ、こいつは風紀委員長雲雀恭弥！！

雲雀「ねえ、何してるの？」

麗「今日おにぎり実習するからその練習」

雲雀「僕に無断で教室を使うのは許さないよ。噛み殺していい？」

麗「お、おちつけて。ここで暴れても物が壊れるだけだって」

めんどくさいのが来たな・・・

雲雀「一瞬で終わらすよ」

そういった雲雀恭弥（以下雲雀）は、いきなり仕込みトンファーで襲ってきた

右から一発、左から二発。私はギリギリのところではけた



まだまだ余裕はある

雲雀「ワオ、僕の攻撃をよけるなんて。でも次はそうはいかないよ」

左から一発、右から一発、また右から・・・速いな

雲雀「いや結構できるな・・・私も本気を出すかな・・・」

雲雀「そろそろ、噛み殺されてくれないっ!!」

ガンッ

何かと何かがつづかる音がした

家庭科室は少しの間、静けさに包まれた

何かを腕にはめている麗と何も持たない雲雀の姿があるだけだった

雲雀のトンファーは床に落ちている

雲雀「ワオ、君やるね」

先に口を開いたのは雲雀だった

麗「今のあなたじゃ私に勝てないわね。でも私にこれを出させるなんてたいした強さよ」

そうやって私は腕につけているものを見せた

その瞬間雲雀がムツとした顔をした

(あつ、意外とかわいい・・・)

雲雀「今日はここまでにしてあげるよ。ところでそこに置いてあるのは何だい？」

麗「ああ、おにぎりのこと？」

雲雀「ふーん。これがおにぎりね・・・」

パクッ

雲雀「・・・・・・・・何これ。君、いったい何を入れたの？」

麗「えーと、今雲雀さんが食べたのはあんこにマヨネーズを入れ

たものだよ」

雲雀「君信じられない・・・やっぱり噛み殺す」

麗「ちょっと、ちょっと待ってよ。私がいったい何をしたっていうんだよ」

急に襲いかかってくるしいったい何なんだよ

それにしてもいつトンファーを拾ったんだ？

雲雀「いい加減あきらめなよ」

トロン

麗「った」

ほほから何か熱いものが流れ落ちた・・・血だ

こいつ、私に傷を付けたのか。本当に強いな

でも私に勝つのはまだ早い

麗「あなたのその強さは認めるけど、まだまだだよ」

そう言いながら放った私の足払いが見事に決まった

雲雀のトンファーを奪い雲雀につきつける

麗「まあ、こんなものでしょ。いい加減引き上げな」

雲雀「うるさいよ。噛み殺す・・・と言いたいところだけどやめておこらう。

君、気に入ったよ。また時間のあるときに手合わせしよう」

一方的に決めつけて雲雀は家庭科室を出て行った

全く変なのに絡まれたな・・・

それよりそんなに私の料理はまずかったのだろうか？

---

s i d e 雲雀恭弥

雪風麗。面白いやつだな・・・

それにしてもあの強さは普通の女子中学生ではないな・・・

調べてみるか

s i d e リボン

あいつが雲雀恭弥か・・・

雲の守護者にもってこいだな

それにしても麗の奴相変わらず料理が下手だな。自分では気付いていないみたいだけどな

これからが楽しみだ

## 標的6 弱点(後書き)

こんな感じでよかったですかね・・・

次も雲雀さんは出す予定です)\*^|^\*(

次回もお楽しみに

## 標的7 おにぎり(前書き)

こんにちは(^-^)/

タイトルが微妙ですが私にはネーミングセンスがないのでご了承ください・・・



## 標的7 おにぎり

Side 笹川京子

登校中ツナ君に会った

京子「おはよう、ツナ君」

ツナ「おはよう、京子ちゃん」

京子「ツナ君、今日ね家庭科でおにぎり実習があるんだ」

ツナ「そうなんだ」

あっ、そうだ。今日作ったおにぎりツナ君にあげようかな・・・

side 沢田綱吉

---

京子ちゃんたち今頃家庭科でおにぎりを作っているんだろうな・

そつえば京子ちゃんは誰にあげるんだろうか

俺なんかにくれるわけではないし・・・

山本「おう！どうしたんだ、ツナ？ボーっとして」

ツナ「いや、なんでもないよ」

山本「そうか？あつ、わかったぞ。ツナこのあとの女子におにぎりもらおうか考えていただろ」

ツナ「そつそんなことないよ！！」

山本勸が鋭いなあ・・・

獄寺「野球バカ！！10代目に向かってそんな事を聞くなんて・・・  
（本当はオレも気になるけど）」

山本「んっ。別にいいじゃねーか。なあツナ」

獄寺「うるせーんだよ」

山本「なんだよ、そのいいかた」

獄寺「ああ。てめーやんのか」

山本「別にいいぜ」

ツナ「ちよつと待って！！落ち着いてよ2人とも」

2人に暴れてもらったら大変なことになるよ・・・

それにしても本当に2人は仲が悪いよな

ガラガラ

女子たち「皆さん。今日は女子が作ったおにぎりを男子にあげちゃぞ」

男子たち「待ってましたー！！」

京子ちゃんはどこだろう・・・

あつ、いたー！！

んっ、待てよ。あそこにいるのは・・・・・・ピアンキー!?!?

ピアンキー」うふふ「・・・」

ああ・・・

ピアンキのやつ京子ちゃんのおにぎりとポイズンクッキングと入れ替えやがった

京子「ツナ君！！私のおにぎり食べる？」

ツナ「えっ・・・」

うれしい・・・けどそれは・・・

京子「あっ・・・ツナ君もそかしてしゃけ味嫌いだった？」

ツナ「いや！！そんなことはないよ」

オレだって食べたいけどそれには毒が・・・

ピアンキ（愛さえあれば食べられるはずよ・・・）

山本「おっ、このおにぎり食べないのか？オレもらいつ」

獄寺「オレももらっぜ」

京子「いいよー!!」

ああ・・・それを食べたらだめだ!!

山本、獄寺君それを食べたら死んでしまう・・・そんなのだめだ  
!!

ツナ「食べたなら死ぬんだぞー!!」

そうしてオレは山本と獄寺君のもっていたおにぎりをはじき飛ば  
した

リボン「よくファミリーを守ったな。それでこそボスだ」

ズガガンッ

ツナ「復活死ぬ気でおにぎりを食っ!!」

パクパクパク

モグモグモグ

ツナ「うまい」

ピアンキ「ポイズンクッキングが効かない!？」

リボン「死ぬ気弾をへそに撃つと鉄の胃袋だ。アイアンストマック何食ってもへっ  
ちやらだ」

ツナ「たりねー」

生徒「あ、あれ?おにぎりが・・・あ!!--ツナが食ってるっ」

ツナ「まだ足りねー」

生徒「うわ!!--こいつ無差別に食いまくる気だ!!--誰か止める」

ピアンキ「くそうボンゴレ10代目。でも必ずリボンを取り戻  
す」

シュウウ

あっ、死ぬ気が解けた

オレやっちゃったよ、またみんなから変な目で見られるよ

でも、ポイズンクッキングを食べて生きてるのはラッキーだったな

獄寺「男らしかったっス、10代目」

ツナ「・・・？」

山本「やるなー、ツナ」

ツナ「・・・？」

何のことだろう・・・？

みんなは、沢田の「食べたら死ぬんだぞ」という言葉を「オレが京子からもらったおにぎりを食ったやつはぶっ殺すぞゴリアー!!」「ぐらにとっていた・・・」



この日の自宅にて……

ツナ「いったくおなかが痛い！」

リボン「どうしたんだツナ？」

ツナ「いや、急におなかが痛くなってきて……」

リボン（ツナには特殊弾を撃ったから大丈夫なはずだ……もしかして……）

「おいツナ、もしかして麗のおにぎりも食べたか？」

ツナ「んっ？雪風さんの？たぶん食べたよ。それがどうしたの？」

リボン「なるほどな……（まさか麗の作る料理がこんなにひどいなんて……）」

それは、食わたりだぞ」

ツナ「えええ〜。もう、おにぎりはじじじだ〜」

---

side 雲雀恭弥

なんかおなかが痛くなってきたな

これもあの雪風麗というやつの子だ

今度会ったら噛み殺しておこう・・・

S i d e 雪風麗

---

麗「ハクツション！」

誰かがうわさしてやがるな・・・

それにしても今日の沢田はおもしろかったな

今日学校にいたビアンキと獄寺隼人は確か腹違いの姉弟だったよ  
な・・・

獄寺はビアンキと昔何かあつて姿をみるとおなかを壊すんだよな

ボンゴレの行く先が不安だな・・・

標的 7 おにぎり(後書き)

内容がほとんど原作に近づいたですね・・・> m ) ( m <  
言い訳に聞こえるかもしれませんが最近学校のことですごく・・・

(言い訳ですよね(T-T))

原作とは違った内容が書けるよう頑張ります!!

**標的 8 観察日記2 (前書き)**

投稿遅れてすみません

土日はいろいろ忙しくて・・・

## 標的8 観察日記2

○月 日

この日は最悪だった。何も書きたくない

○月?日

昨日のことを書こう

昨日は家庭科でおにぎり実習があった日だ

私は料理はできないほう?でそこまではひどくないと思うけどよくりポーンに「お前は料理するな」と言われる(ポイズンクッキングよりはましだろう)だから調理室で練習をしていた

そのとき、風紀委員の雲雀恭弥いきなり入ってきて「噛み殺す」とか言い出して襲ってきた

私は少しりポーンに鍛えられたことがあるから戦いはできる

その私に雲雀は小さくではあるが傷を付けた。一般の人が・・・だ

さすがはりポーンが目を付けただけはある

これからも雲雀の実力は伸びていくだろう・・・少し怖いな

s i d e 雪風麗

---

麗「今日の出来事はこのくらいかな」

私はノートを閉じた

外は日が照っていて暑い

窓をすべて開けると風がよく吹いて気持ちがいい

ここは教室。もう、6時間目も終わって教室には私以外誰もいない

麗「さて、今日は帰るか」

ガラガラ

私が教室をでようとしたら誰かが入ってきた

麗「あつあんたは・・・雲雀恭弥!!」

雲雀「やっと見つけたよ。今日はよくも不思議なものを食べさせてくれたね。」

お礼に噛み殺してあげるよ」

いや、それお礼じゃないから・・・

そう思いながら口にはできない。もっとややこしくなるから

雲雀「おにぎりを食べておなかを壊したのは初めてだよ。キミ料理できないの?」

麗「りっ料理ぐらいできるわよ!これでも女子ですから」

と焦ったように言う



ビュンッ

あつぶな。雲雀のやついきなりトンファーで頭を狙ってきやがった  
この後も次々と雲雀の攻撃が襲ってくる

(こいつ・・・今朝戦った時より腕をあげている!?)

雲雀の攻撃は今朝よりも動きが速かった

だんだん壁際に追い詰められていく

麗「あゝ。めんどくさいな」

雲雀「何だつて?」

めんどくさいと言われたのが気に入らないのかムツとした顔を  
していた

私は正直今日は戦う気分じゃなかったし、早く帰って寝たかった

麗「・・・・・・・・っ」

雲雀「何呟いてるの?早く本気だっ!」

私は動きを停めて教室を出て行くつもりとした

雲雀「キミ、いったい何をしたの」

雲雀も動きを停めていた。いや、動けなかった

雲雀の足と床が氷で固定されている

麗「さーね」

そう言い残して教室を出た

アレを使うのは久々だったな

○月○日

やっぱり雲雀は怖い

昨日のことを根に持っているんか朝からからまれた

途中でリボンが入ってきたから大事にはならなかったけど、今度会ったら噛み殺すとか言っておそってきそうだな・・・怖っ

○月 日

今日は沢田と三浦ハルというやつが接触したらしい

三浦ハル（以下三浦）は、緑中に通っていて頭はいいが時々おかしなことをする

普通の一般人だ

特に不審なことはない？し三浦はマークしなくてもいいだろう

月？日

散歩をしていたらあわてて走ってきた男とぶつかった

その人はすぐに走って行ったけど何かこの世で起こったとは思えないものを見たっていうような顔をしていたな

後からあったりボーンに聞いてみたら沢田の家の近くまで来て帰って行ったらしい

だったらあんな顔をしていたのも納得がいくな

「入江正一」

ふと頭に思い浮かんだ言葉

なぜこんな名前が出てきたのかはよく分からない

月 日

昨日は不思議な夢を見た

なんかリアルな夢だったような気もするけど今はよく覚えていない

何か大事なことを忘れているような気がする

## 標的 8 観察日記2 (後書き)

気付いていますか？

麗の口調がだんだん男言葉になっているのを・・・

性格的には男っぽく設定していますからね

標的9 ユメ

?「し……ちゃん……ね……の……しく……」

?「いまさら……びゃ……ん……」

麗（何なんだろう……何言ってるのか全く分からない。でもなんか懐かしいような気がする……）

?「でも……こ……けいかく……じょう……  
なの？」

?「だい……すよ……し……ぱい……なくても」

?「い……ら……ちゃん……麗を……ただじゃ……  
……よ」

麗（今、私の名前を呼んだ!？）

? 「……………も、10年バズーカっていうのはすごいね」

麗（会話がはっきり聞こえるようになった!!）

? 「あなたと言う人は……不思議なものが好きですよね」

? 「アハハ。でも、正ちゃん程ではないと思うな」

? 「そうですね……自分の妹を利用するような人に言われたくないですね」

? 「……………そのことに触れないでくれる? 僕も不安だから正ちゃんにお願いしてるんだよ」

? 「百蘭さん……………」

? 「これからについてだけ……………」

.....

今のは何だったんだ？

夢？にしてはリアルすぎる

私のことを話していたような気がするけど.....内容を思い出せない

何だろう.....

あの声。とても懐かしい



標的9 ユメ（後書き）

これは麗の記憶なのか・・・

入江正一に会ったことで麗の時間が少しずつ動き出した

これは未来編につながると思います・・・

標的10 笹川了平（前書き）

急ピッチで書いたので内容が薄くなっているかもしれない・・・

毎度毎度すみません（――）m  
< m

標的10 笹川了平

side 沢田綱吉

ツナ「はあく。始業式から寝坊だよ。こりやどつ急いでも遅刻だな」

リボーン「やってみなきゃ分かんねーだろ」

(な・・・何でリボーンが・・・)

ズガンッ

ツナ「うおおおお。死ぬ気で登校する」

？「!?!」

ツナ「うおおおお」

？「まちな・・・ぬおっ」

ダダダダダダダダダ

あゝまたやつちやったよ

間に合いはしたけど恥かいちゃったよ

?「これは、まぎれもない本物・・・」

!?!やべゝ人ひっかけてる

ツナ「だっ大丈夫ですか?」

ゴロゴロゴロゴロ

この人いきなり前回りを始めたんだけど・・・誰?

?「聞きしに勝るパワー・スタミナ!そして熱さ!やはりお前は百年に一人の逸材だ!!我が部に入れ!!沢田ツナ!!」

ツナ「えっ、何でおれの名前・・・」

?「お前のハッスルぶりは妹から聞いているからな」

ツナ「いつ妹!？」

?「おにいちゃん」

?「どうしたキョーコ」

キョーコ?

とつてもなじみ深いような・・・

京子「もーカバン道に落っことしてたよ」

ツナ「京子ちゃん!！」

京子「あ・・・ツナ君おはよう」

えっ・・・もしかしてこの人京子ちゃんのお兄さん!?!!

?「そついえば自己紹介がまだだったな。オレはボクシング部主  
将笹川了平だ!!座右の銘は“極限”!！」

あ……あつい……

了平「お前を部に歓迎するぞ沢田ツナ！！放課後ジムにて待つ！」

ど……どうすればいいんだよ

オレがボクシングできっこないけど京子ちゃんのお兄さんに嫌われたくないし……

京子「ツナ君すごいな。あんな嬉しそうなお兄ちゃん久しぶりに見たもん！」

うわぁ〜断りにくくなってきた

放課後

オレはボクシングのジムの前まで来ていた

やっぱりボクシングなんて無理だよ〜どうやって断ろうか・・・

ガラガラ

了平「おお！！沢田待つてたぞ。早速だが紹介しよう。パオパオ  
教師だ！沢田の評判を聞いてタイから駆けつけてきたんだ」

（てんめ〜）

そこにいたにはリボンだった

そこでこっそり

ツナ「お前はめやがったな。オレにボクシングをやらす気か!？」

と聞いてみた。そしたら案の定

リボン「あたりまえだ。ちったー強くなりやがれ」

とかえってきた

京子「ツナ君頑張って」

京子ちゃんまで応援してるしどっしり

山本「負けんなよ」

獄寺「10代目」

み・・・みんなきてる。ますます断りにくくなってきた

っていうかなんでみんなパオパオ老師がリボンってことに気がつかないの!?

リボン「パオン」

了平「そういえばあと一人入部希望者がいるんだが・・・まだきとらんのか」



ツナ「あと一人いるんですか？」

了平「おおー！きたぞ。ほら遠慮せずに入ってこい」

お兄さんが無理やりとも見える形で引っ張ってきたのはなんと・  
・雪風麗だった

ツナ「ゆっ雪風さん！！」

麗「はあゝ。何でこんなことになるのよ……」

様子を見るに雪風さんもお兄さんに強制的に入部させられそうに  
なっているらしい

リボン「おもしろくなってきたな」

標的10 笹川了平（後書き）

次は麗が了平にボクシング部に誘われたきっかけが分かるかも・・・

標的11 新しいファミリー(前書き)

今日は英検の2次試験があつてとても緊張しました

そろそろ夏休みですね

楽しみだな(受験生としての自覚なし)

## 標的11 新しいファミリー

Side 雪風麗

なぜか私は笹川京子の兄である笹川了平にボクシングジムまで連れてこられていた

了平「遠慮せずにこんか。沢田もいるぞ」

なんか沢田も巻き込まれているらしいがあいつにはいい経験だろう

それにしてもなんで私が笹川了平に巻き込まれているかと言つと・  
・

約3時間前

昼休みは何もすることがないな

校舎の裏をぶらぶらと歩いていた時だった

「おい、お前1年だろ。1年がこんなところを歩いてていいのか  
「よ

変な奴にからまれた

確かあいつらは獄寺にやられた3年の奴らだったような・・・

「おい！無視してんじゃねーよ。今俺たちは虫の居所が悪いんだ  
「よ

麗「・・・・・・・・」

「いつまでも黙ってんじゃねーぞ」

麗「うるさいな」

「は？お前何言ってるのかわかってんだろうな」

麗「……………」

「……………なっなんだよその目は」

麗のにらみで3年が少しひるむ

沈黙のなか緊張感が漂う

「てめえ、俺たちが手を出さないからっていつて調子こいてんじやねーぞ」

沈黙を破ったのは3年の奴らだった

リボンといい雲雀恭弥といい何で私をいらいらさせるやつらが多いんだ

麗「今私も虫の居所が悪いんだよ」

「てめえ、ふざけんな!!」

3年の奴らが殴りかかってきた

そんな奴らに麗の回し蹴りがヒットする

「いつて。なにすんだよ」

麗「先に手出てきたのはそつちだから何をされても文句はないよね」

そつ言つて麗は3年の一人にとび蹴りをくらわす

麗「もうダウン？張り合いのないやつ」

「つな！！」

残りは二人。さてどうしようか・・・

「くらえつ」

3年のパンチをかわしそいつの顔面に強烈なパンチをたたきこむ  
見事に鼻血を吹き出し倒れてく

これは鼻の骨折れたかもな・・・

「うち、なめんじゃねーぞー!!」

残り一人

3年が襲いかかる暇もなく麗の蹴りが3年の横腹にヒットする

「うがっ」

麗「つまんないの」

汗一つかいていない余裕の麗の前に3人の男の山があった

ちよつとやりすぎたかな・・・

まあいいか。先に仕掛けてきたのはあっちだし

?「こっこれは・・・」

やっば・・・人に見られてた!!



？「おい！これは貴様一人でしたのか！？」

麗「えつとですね、これには深いわけが・・・」

？「お前の強さ・・・気に入った。俺はボクシング部主将笹川了平だ！！ボクシング部に入部ろ！！」

麗「なんでこうなるの！？」

・・・・・・・・・・・・・・・・といてことで私はここにいる

了平「紹介しよう！！我が部のエースとなるであろう名前は・・・なんだ？」

おい！！私の名前も分らず連れてきたのかよ

麗「雪風麗です」

---

side 沢田綱吉

なんで雪風さんがここに来るの〜

リボーン「・・・ニヤッ」

リボーンの奴ますます面白そうな顔をしゃがって

しかも雪風さんの制服についてるのって血じゃないの!!

いったい何があったんだ

麗「私、ボクシングできないので帰らせていただきます」

了平「そんなことは俺が許さん！」

うわぁ・・・雪風さんからなんか黒いオーラが・・・

麗「そこにいる沢田綱吉より弱いので失礼します」

えっ、何でこうなるの

雪風さんさっさと出て行かないでよ・・・

了平「そうなのか。3年生3人に対して1人でやっつけた雪風より強いとは。

では、沢田始めるぞ」

どっどっどっどっど

了平「お前のボクシングセンスはプラチナムだ！！必ず迎えに行くからな」

うわーやっちゃったよ

京子ちゃんのお兄さんを思いっきり殴っちゃったよ

リボーンのやつがオレに死ぬ気弾なんかを撃ってくるから・・・  
でもお兄さんに死ぬ気弾を撃っても何も変わらなかった時にはび  
っくりしたな

ってことはいつでも死ぬ気なんだ・・・

でも京子ちゃんに嫌われなくてよかった。お兄さんにはむしろ好  
かれたような気もするけど・・・

リボーン「おい、了平。お前ファミリーに入らねーか」

ツナ「こっカラー。逆スカウトするな」

リボンのやつちゃっかりしてやがる・・・

俺の人生これからどうなってくんだよ

---

side 雪風麗

まったく、大変な目にあっただな・・・

リボンのことだから笹川了平をファミリーにしているだろう

着々とファミリを集めてるみたいだけど沢田のへたれっぷりに

はあきれるよな

ボスがあんなんで本当にボンゴレは成り立つのか・・・

---

s i d e リ ボ ー ン

笹川了平。いつでも死ぬ気とはたいしたやつだ

ボンゴレ晴れの守護者にふさわしい

後は雲と雷と霧の守護者だな

いい加減麗もあきらめて雪の守護者になればいいのに

あいつの戦闘力は半端じゃないからな・・・

## 標的12 草食動物と肉食動物

季節は夏

笹川了平がツナと戦ってから一週間が過ぎた

蒸し暑い中皆ばてていたが雪風麗・雲雀恭弥の二名はイライラしていた

---

side 雲雀恭弥

ああ、今日も暑いな。早くこの会議終わらないかな

「えーっ何これ。応接室使う委員会がある。ずるい！」

「おい！風紀委員だぞ！」

「はっ」

恭弥「何か問題でもある？」

「いえ、ありません！すすみません雲雀さん」

恭弥「じゃー続けてよ」

あー、めんどくさいな

小動物のくせに反抗して。まあ、僕に反抗する人は噛み殺すけど

だけど、一年の雪風麗は強かった。態度は気に入らないけどあの強さは気に入った

また戦いたいな。そして血まみれにしてやるう

雪風麗、風紀を乱すやつは許さないよ

それにしても暑い



S i d e 雪風麗

---

麗「ハツハクション!!」

誰かがうわさしてやがるな

どうせリボーンがなんか言ってるんだろう

それにしてもイライラするな。暑いせいもあるけどほとんどは雲雀恭弥のせいだな

雲雀のやつ私に会ったびにトンファーを構えて襲いかかってくるし、やたら風紀委員をよこしてくるし毎日が戦闘になってるよ

もしかしてまだおにぎりのことを根に持ってるのか……

器の小っさい男だな

今同じ時に雲雀がくしゃみをしたことは麗は知らない

---

side 沢田綱吉

リボーン「ファミリーのアジトを作るぞ」

昼休み、屋上でいきなりリボーンが言ってきた

「どういつときのリボーンってなんか変なことを考えているんだよ  
な・・・」

山本「へー、面白そうだな。秘密基地か」

獄寺「子どもか、おめーは」

山本はまたなにかの遊びかと思ってるのかな

それにアジトってなんかいやだな

獄寺「10代目、いいじゃないっすか。ファミリーにアジトは絶対必要ですよ」

いや、「冗談じゃないよ」

マフィアっぽくアジトだなんて・・・

それにアジトを作る場所なんてどこにもないよ

リボーン「アジトの場所は応接室だぞ。今はほとんど使われていねーんだ

家具も見晴らしもいいし立地条件は最高だぞ」

山本「そんじゃ、行くか」

え〜。本当にアジト作るの〜

あ〜。なんだかんだ言っただけで応接室の前まで来ちゃったよ〜

山本「へ〜。こんな良い部屋があるとはね」「

side 山本武

学校の中にこんな良い部屋があったなんてビックリだな

んっ？誰か先客がいたみてーだな

雲雀「君、誰？」

こ、こいつは風紀委員長でありながら不良の頂点に君臨するヒバリこと雲雀恭弥！！

獄寺「何だあいつ？」

山本「獄寺、まて……」

雲雀「風紀委員長の前では煙草消してくれる？ま、どちらにせよタダでは帰さないけど」

獄寺「んだとてめー」

聞いたことがある。雲雀は気に入らねーやつがいると相手がだれであること……

雲雀「消せ!!」

ビュッ

仕込みトンファーで滅多打ちにするって

厄介なのに捕まったぞ

獄寺の煙草の火を一振りで消しやがった

雲雀「僕は弱くて群れる草食動物が嫌いだ。視界に入ると噛み殺したくなる。まあ、雪風麗みたいな肉食動物でも僕が噛み殺してあげるけど・・・」

雪風麗・・・？雲雀といたいどんな関係があるんだ？

ツナ「へへ。初めてはいるよ、応接室なんて」

山本「待てツナ!!」

ここで部屋の中に雲雀がいることを知らないツナが入ってきてしまった

ガッ

ドザァッ

雲雀「一匹」

くそつ。ツナが雲雀のトンファーで殴られた

獄寺「このやろ、ぶっ殺す！」

獄寺のパンチを余裕でかわした雲雀は獄寺もトンファーで殴る

雲雀「二匹」

山本「てめえ・・・!!」

雲雀がトンファーをかまえ山本を襲う。山本は何とか攻撃をかわしている

雲雀「けがでもしたのかい？右腕をかばっているな」

山本「・・・!!」

雲雀「当たり」

その瞬間雲雀が山本の右腕に向かって回し蹴りをくらわした  
部屋の隅まで吹っ飛んでいく

雲雀「三匹」

---

s i d e 沢田綱吉

あゝいゝゝ



いったい何が起こったんだ？部屋に入っていきなり何かで殴られたし……

ツナ「……！獄寺君！山本！なっなんで!？」

周りを見渡したら気絶している獄寺君と山本が倒れていた

しかも、学校の中で最強と言われる雲雀恭弥がトンファーを構えてオレの前まで来ていた

雲雀「2人は起きないよ。そういう攻撃をしたからね。まあ、あの子だったらこんな攻撃はきかないだろうけど……」

ツナ「えっ……!」

っていうことは、この人一人で獄寺君と山本を倒しちゃったってこと……？

やばい……!このままじゃ殺されちゃうよ

雲雀「ゆっくりしていきなよ。救急車は呼んであげるから」

うわぁ〜めっちゃくちゃパンチ……!

チャキツ

んな。リボーンの奴こんな時にオレに銃を向けてやがる。もしかして死ぬ気弾を撃つつもりじゃ・・・

リボーン「死ね」

ズガンツ

ツナ「復活リ・ボーン！！死ぬ気でお前を倒す！！！！」

雲雀「何それ。ギャグ？」

雲雀がトンファーを思いっきり上に振り上げる

ガツ                      ドツ

トンファーがツナのあごにヒットした。ツナは床に倒れこむ

雲雀「あご割れちゃったかな。さーて、後の2人も救急車に乗せてもらえるくらいにぐちゃぐちゃにしないとね」

その時雲雀の後ろでツナが起き上がる

ツナ「まだまだあゝ!!」

ツナのパンチが雲雀の左ほほを殴った。雲雀は驚いた顔をしている

レオンがツナのもとに飛んできてスリッパに形を変える。それをツナが持つて

ツナ「このたわけが!!!」

パカアン

雲雀の頭をたたいた。雲雀が一瞬ふらついた

雲雀「ねえ・・・殺していい？」

雲雀が殺気を出したとき

リボーン「そこまでだ。やっぱりお前つえーな」

リボーンが止めに入った

雲雀「君が何者かは知らないけど僕、今イラついているんだ。横になって待っててくれる」

トンファーをまわして勢いをつけながらリボーンに向かって振り下ろす

その攻撃をリボーンは十手を使って止める

雲雀「ワオ。すばらしいね君」

リボーン「また今度雪風麗について教えてやるから今日はここままでしてくんねーか？」

雲雀「・・・！雪風麗についてね・・・まあいいだろう。赤ん坊、今度会ったときは本気で勝負しようよ」

リボーン「気が向いたらな・・・」

ツナ「なあ！！あいつにわざと合わせた！！」

俺たちはどうやって逃れたか分からないけど屋上に来ていてリボーンから衝撃的事実を聞かされていた

リボーン「危険な賭けだったけどな。打撲とすり傷ですんだのはラッキーだったぞ。

お前たちが平和ボケしないためのトレーニングだぞ」

何言ってるんだよ、絶対に雲雀さんに目付けられたよ

リボーン「雲雀は将来必ず役に立つぞ」

ファミリーをまた一人ゲットしたと思っているリボーンだった

## 標的12 草食動物と肉食動物（後書き）

雲雀と麗って少し似ているところがあるんですよ・・・

戦いが強かったり1人が好きだったり

リボーンが雲雀に麗のことを話すところは省略しますがもう少ししたら麗の過去が分かるかも・・・

次回もお楽しみに！！

### 標的13 観察日記3

月○日

今日は体育祭だ

そういえば体育祭のクライマックスに行われる“棒倒し”の総大将に選ばれたのは沢田だったな。

笹川に強制的にさせられていたが・・・あいつにそんなことができるのだろうか？

昨日河原で練習しているところを見たけど全然駄目だな

山本は持ち前の運動神経でかなりいい成績をとっている

獄寺と笹川は会うなり喧嘩を始めた。まあ、嵐の守護者と晴れの守護者は相性悪いからな・・・

三浦やビアンキたちは沢田の応援に来ている。リポーンはというと何か面白いことを考え付いたらしい

(リポーンの面白いことはややこしいことになるからな・・・)

案の定沢田がほかの総大将を襲ったと思われて言い争いになっている

そんな中、笹川が2対1という無茶な提案を押し通すし相手チームの総大将が雲雀恭弥になるしかなり混乱していた

結果は言う間もなく沢田がぼこぼこにされて終わった

月 日

今週はいろいろなことがあったな・・・（沢田にとって）

まずは『殺され屋』のモレッティがあらわれて沢田を驚かせていたな

次の日にはランボとビアンキとリポーンによってはめられて山本の家のすし屋でバイトすることになったな。さらに獄寺のせいで借金上乘せされてたしその分は自分が責任をとるって出前の分はビアンキが作るって言って焦っていたな

ビアンキがまともな料理を作れたと思ったら時間差でくる“ポイズンクッキング3時間殺し”という新技を開発しちゃったので出前はず・・・

沢田、当分バイト三昧決定・・・・・・・・

?月〇日

今日はボンゴレの守護者が校庭に集合していた

私は屋上で観覧している



リボーンに教えてもらったがこれからランボの保育がかりを決めるらしい

まあ、結果は目に見えているが・・・

獄寺は10代目の右腕の座がほしいゆえに頑張つてランボをあやしていたが結局はキレてしまい山本の番に移ってしまった。山本はキャッチボールをしようとしているようだ。最初はいい雰囲気だったが山本がボールを投げる瞬間目つきが変わった。本気で投げたボールがランボの顔に直撃して泣かせてしまった

最終的に沢田がランボの保育がかりに決まった

それにしても山本のボールの威力半端じゃねー

ランボに当たってそれたボールがここまで来たが壁にひびが入ってぞ・・・山本恐るべし

?月?日

登校中犬に襲われそうになっている沢田が小さな女の子に助けられているところを発見した

特に興味がなかったからかわらなかったが子どもに助けられるほど弱いとは・・・

んっ？そういえばあの女の子人間爆弾といわれてる香港の殺し屋のイーピンじゃなかったっけ？

廊下でイーピンに何か言われている沢田を見かけた

屋上まで連れて行かれた沢田はイーピンの“餃子拳”ギョウジケンをくらって  
いた

その技の正体がニンニクであることをからかってイーピンの“筒ピ子時限超爆”ンスジげんちようぱくを発動させてしまった

山本が何とか上空へ投げしてくれたからよかったものの沢田のへたれっぷりに改めてガツカリする

これからはイーピンを挑発しないようにしないと・・・

そういえば私がボンゴレの関係者って知っている人って何人いた  
っけ……？

沢田が知っている人でいえばシャマルとリボンとピアンキぐら  
いかな……

他の人は沢田が知らないからな……あっ！！跳ね馬・ディーノ  
！！

あいつのことだからいつかは沢田に会いに来るだろうな……そ  
の時あいつに会ったら絶対に私の正体ばらされる！！

ボンゴレの関係者なんてばれたら雪の守護者のことが断りにくく  
なる

ディーノにどごちやって口止めしよう……

標的13 観察日記3（後書き）

ないよう少なくてすみません（・・）

今回は面白い作品をかけるように頑張りたいと思います

標的 14 跳ね馬ディーノ（前書き）

なんか原作と変わらないような・・・

でも次回はオリジナルが入るので飽きずに読んでください！！

## 標的14 跳ね馬ディーノ

side 雪風麗

麗「うあああああああああああああ……」

私、雪風麗は焦っていた。そう、叫びたくなるほど……

なぜかって？それはあいつが……ディーノがこの並盛に来たって情報が入っからなんだよ！！

あいつが沢田に会うのはいいとしてあいつと沢田が一緒にいるとき私と会ったら絶対にボンゴレとの関係をばらされる。それだけは絶対に阻止しなければならない

あいつのことだから直接沢田の家まで行くだろう。たくさん部下を連れて……

大方予想はついているからどうやってディーノを口封じするのが問題だ

---

side 沢田綱吉

なっなんだこれ〜!!!

今日、普通に学校で過ごして家に帰ってきたら家の前に高そうな車は何台も止まっていた

オレ何も悪いことしてないよな・・・？それに家の前に立っているスーツを着た人はいったい誰なんだろう？それにしても迫力が半端ない・・・

ツナ「あの・・・すみません、通ってもいいですか？」

男の人「ダメだ。今は沢田家の人間しか通せないんだ」

ツナ「えっ・・・沢田綱吉ですけど・・・」

男の人「なっ！！この方が！！」

家にあがらせてもらうことはできたけどいったい何なんだ！？またリボーンの仕事だとは思うけど・・・

オレの部屋に向かいながらそんなことを考えていた

部屋の扉を開けると中にもスーツを着た男の人が何人かいた

リボーン「待ってたぞツナ」

ツナ「いったいこれは何なんだよ」

ディーノ「いよお、ボンゴレの大将。はるばる遊びに来てやったぜ。オレはキャバローネファミリー10代目ボスディーノだ」

またマフィア関係者が来た！しかもボスってどれだけ怖いんだ！

これからオレどうなるんだろう・・・



---

s i d e デイノ

ツナ「な!？」

リボーンがボンゴレの10代目を鍛えてるって聞いて見に来てみたがこれは……

デイノ「こりゃあダメだな。オーラがねえ、面構えが悪い、覇気もねえし期待感もねえ。幸も薄そうだ」

リボーン「足も短けえ」

デイノ「ボスとしての資質ゼロだ」

ツナの奴シヨックを受けた顔をしてるな

ディーノの部下「ハハハハハハハハ」

ツナ「おいリボーン！何なんだよこのやばい連中は！」

リボーン「ディーノはお前の兄弟子だぞ」

ツナ「は？」

ツナの奴動揺しまくりだな。麗が嫌がっていた理由はこれか・・・まあこんなじゃ守護者なんかしたくないよな。それにしてもこいつ俺の昔にそっくりだな

リボーンのおかげで今じゃ5千のファミリーを持つ一家の主だ。本当はもつといるんなことを教わりたかったがツナのところに行くつつうんで泣く泣く送ることになったが・・・

ツナ「あの・・・さっきから誤解してると思うんですけど、僕はマフィアのボスになる気なんてサラサラないんです」

ディーノ「ハハハ、リボーンの言うとおりだ！オレも最初はマフィアのボスなんてクソくらえと思ったもんだ。ハナからマフィアのボスを目指す奴にロクなやつはいねー。お前は信用できる男だ」

ツナ「いや……でも僕は……」

---

side 沢田綱吉

このディーノっていう人かつこよくて若いけどマフィアのボスなんだよな……

いくら兄弟子でボスだからってその人に言われてのオレはボンゴレの10代目を継ぎたくないんだ

ディーノ「生やらねーっつーんなら……」

なんだ！？ポケットに手を突っ込んで何をとりだすんだ？

もしかして拳銃！？オレ撃ち殺されちゃうの～いやだそんなの～！！

ディーノ「かむぞ」

ツナ「うわあ～！！！！」

え……………？

カメ……………？

ディーノの部下「ハハハハ！！ひっかかった！！」

もしかして……………今のおやじギャグ……………？

ディーノ「こいつはカメのエンツイオって言ってリボーンにレオンくねって言ったら代わりにくれたんだ」

リボーン「レオンは俺のだからな」

そんなこと知るか!!

ランボ「ガハハハ、枝付きブロッコリーだぞ〜!」

またあいつらか・・・

ランボがイーピンを追いかけまわして遊んでいる

緊張感のないやつらだなあ・・・ああ、またランボの奴手榴弾持って走り回って・・・あれほど危ないからやめろって言ったのに

ランボ「ん!? くぴゃ!」

言ったこつちやない。コンセントに足をつっかけて転んだよ・・・

ランボ「ガ・マ・・・ん?」

ツナ「バカー!!」

ああ! どうしよう・・・!? ランボがこけた拍子到手榴弾が髪の毛から出てしまったよ・・・

しかも、ピンが抜けた状態で部屋の外に・・・

リボーン「やべーな。外にはディーノの部下がいるぞ」

ツナ「あっ！そういえば！！」

バツ

突然ディーノさんが窓から外へ飛び出した

(え〜！！ここ二階だけど大丈夫なの！？)

ディーノ「てめーら伏せろ！！」

そういつたディーノさんはムチを取り出して手榴弾をからめ上に  
放り投げた

その瞬間手榴弾が爆発した。後一瞬でも遅かったらどうなってい  
たか・・・

ツナ「あの人かっこいい・・・」

リボーン「わかったか？ファミリーのために命を張るのがマフィ  
アのボスだ」

ツナ「何でもかんでもそこに結び付けるなよ!」

リポーン「ディーノ、おまえ今日は泊っていけ」

ディーノ「オレはいけどどこいつらがな」

リポーン「部下は帰していいぞ」

おい! ! 何勝手に決めてんだよ! !

ああ・・・オレはマフィアになんてなりたくないしかかわりたくもないんだよ・・・

ディーノさんに気に入られるのはうれしいんだけどマフィアになるのは絶対ごめんだし・・・

ディーノ「そーいやツナ、お前ファミリーはできたのか?」

リポーン「今んとこ獄寺と山本。あと候補がヒバリと笹川了平と・・・」

ツナ「友達と先輩だから! !」

ああ、これから先が不安だよ・・・

ツナはこれからディーノが部下がいないと何もできに事を知ることになる

そしていろいろな災難に巻き込まれることは少し先のはなし・・・



ああ、どろどろ……

早くディーノに口止めしとかなきゃ！！

今どこにいるんだよ〜

一人嘆いている麗であった

標的14 跳ね馬ディーノ（後書き）

どーも、今日も暑いですね（そちらはどうかわかりませんが・・・）

最近Walkmanを買ってテンションが上がっている音無ですが  
なかなか夏休みの宿題が手につかず・・・

でも小説のほうはやる気全開です！！

今後とも応援よろしくお願いします（<ー>）

標的15 並盛中央病院（前書き）

夏休みということでもいつもより長めで作ってみました

標的15 並盛中央病院

side 沢田綱吉

ああ、何でこんなことになったんだろう・・・

オレは今、並盛中央病院に入院している

なぜこんなことになったのかというとディーノさんがトレーニングということでオレにムチさばきを教えてくれることになったんだ。(オレは全然嬉しくないけど・・・)

スパーリングパートナーとしてスポンジスポンのエンツイオが相手になってくれたんだけどオレがムチで飛ばした方向は井戸があるところで大変なことになったんだ。エンツイオはディーノさんがなんとかしてくれて助かったけどそのあと俺が一人でこけて入院するはめになったんだ

オレってどんだけドジなのかな・・・

しかも同室の人はというと・・・

同室A「おーす、新入り」

同室B「その鞆は並中生か」

同室A「中坊ってことはお前この部屋で一番下っ端だな」

同室B「新しいパシリ誕生ってわけだ」

同室C「松葉杖で歩けそうだな。ヨロピク」

超嫌な感じ……

その時ディーノさんがオレの見舞いに来てくれた。たくさんの部下を連れて……

病院の人超怖がってるよ

ディーノ「ツナ、病院はボスが狙われやすい場所の一つだ。お前持ってなかったらどう？やるよ護身用の銃」

ツナ「！！！」

ディーノさんいったい何を出してるの〜！

いまどき銃を護身用に持っている中学生なんていないし！！オレには必要ないし！！

同室ABC「ひいつ、助けて〜っ」

同室の人逃げ出しちゃったよ

婦長「困りますわよ沢田さん。他の患者さんを怖がらせるような方のお見舞いは!！」

ツナ「す、すみません」

ということでおレは別の部屋に移ることになった

ツナ「やった〜個室だ!」

誰かとおんなじ部屋にいるより1人のほうがずっといいや

だけどその後イーピンやりポーン、ハル、しかも京子ちゃんまでケガの時は笑が一番って言ってなんか変な格好をしてお見舞いに来た

それを考えたのはハルだと言ってたけどハルの企画ってこつも突拍子がないんだ・・・

そのおかげで婦長さんがまた怒ってきた

そのとき山本が大量のお寿司を持ってお見舞いに来てくれた。しかもおとなランボまで

正直オレはけっこ嬉しかった

獄寺「10代目……大丈夫スカ10代目……！」

ツナ「君が大丈夫か……！！！！？」

オレのことを叫びながらきた獄寺君は血だらけになっていた

聞くところによるとお見舞いに来る途中あわてて車に何度かひかれたらしい

獄寺君は平気って言うてるけど絶対に大丈夫じゃない……って  
いつか俺より重症だよ……！！

獄寺「すみません、白いバラだったんスけど……」

白いはずのバラは真っ赤に染まっていた

そのときドアがミシミシいい始めてドアが倒れたと思ったらく  
さんの看護婦が倒れてきた

婦長「何ですかあなたたち!!」

看護婦「婦長ばかりずるですよ!!1人で目の保養をして!!」

婦長「困りますわよ沢田さん!!うちの看護婦をそそのかすような方のお見舞いは!」

ツナ「そつちが勝手にそそのかされたんでしょ!!」

なんか納得いかなかったけどまた病室を移ることになった

その部屋にあの恐ろしい人がいるとは知らずに・・・



s i d e デイノ

なんでかわからないけどあの婦長さんめっちゃ怒ってたな・・・

そう思いながらオレは病院を去ろうとしていた

何で銃を持ってきたらダメなんだ？命を狙われるかもしれないねえつ  
てのに

部下「ボス・・・前から来るあの方はもしかして・・・」

デイノ「ん・・・？あいつは・・・麗じゃないか！」

向こうもオレに気付いたらしくオレを見るなり驚いた顔をして駆けつけてきた

麗「なんであなたがここにいますか・・・？」

なんか気に食わないような言い方だなあ・・・

麗「私はディーノは沢田綱吉のところかリボーンのところにいる  
と思っただけど・・・」

ディーノ「その予想はあってるぜ。今ツナのお見舞いに行ってきたところだ。でもな、オレがツナに銃を渡そうとしたら婦長が起こつてな・・・追い出されたんだ」

麗「あたりまえだよ・・・日本では銃を持つてること自体あり得ないんだよ」

ディーノ「そうだったのか・・・ところでお前は何しに来たんだ？」

そこでオレは気になっていたことを聞いてみたが麗はただ肩をすくめるだけで教えてくれなかった

S i d e 雪風麗

(な・・・何でこんなところにディーノがいるんだ!?)

私が並盛中央病院に入ろうとしたとき会いたくなかったような会  
いたかったような奴に会ってしまった

ディーノ「麗、久しぶりだな」

麗「そうですね。3年ぶりじゃないですか?」

そのあと軽く会話をしていた。そしたらディーノがなぜここに来  
たのかと聞いてきた

その理由は絶対に知られたくない!!だから軽く流したけどディ  
ーノは不満そうにしていた

麗「ディーノ、沢田綱吉にはもう私のことはいったか？」

「ここでディーノに一番聞きたかったことを言う

もし言っていたら沢田にどう言い訳をしようかと考える

ディーノ「ん・・・麗、まだ自分の正体言ってなかったのか。オレが言ってたほうがよかったか？」

麗「いや。まだ言ってなくてよかった。しばらくは正体を明かさずに沢田綱吉をボスとしての資質があるのか見極めていきたいと思っている」

ディーノ「そうか・・・ならお前とは他人のふりをしないとな」

さすがディーノだ話が分かる。部下がないとだめだけどな・・・

まあ、これで沢田に私の正体がばれる心配はなくなった

それにしてもなぜ私があの人に見舞いに来ないといけないんだ！  
！このままバックレてもいいけどそしたら確実にあの人に目つけられるからな。今の時点で目つけられるかもだけど・・・

あとあと面倒だしさっさと行ってさっさと帰るか

……そう思ってあの人の病室までいったけど……

何で沢田綱吉までいるんだ!!? ?

---

side 沢田綱吉

いろいろあってオレはある病室に移ることになったが・・・

な、何で雲雀さんがいるの〜!!!?

雲雀「風邪をこじらせてね、退屈しにぎにゲームをしていたんだ  
がみんな弱くて・・・」

ツナ「んなー!!!」

何があったのか分からないけど雲雀さんの前には気を失っている  
人の山ができていた

ゲームっていったい何なの！？負けたら絶対殺される……

雲雀「相部屋になった人にはゲームに参加してもらってるんだよ。ルールは簡単。僕が寝ている間に物音をたてたら噛み殺す」

ツナ「一方的！！ってか病院じゃあり得ない状況だ〜！」

この部屋絶対無理！！ここにいるんだっただっら家にいるほうがましだよ

ツナ「あの……もうよくなったので退院します！！！」

院長「ダメだよ医師の許可なく退院しちゃ」

ツナ「！！！！？」

雲雀「やあ、院長」

い、院長〜！？

何で雲雀さんと院長が……？

院長「こうして安心して病院を運営できるのも雲雀君のおかげ。生贄でも何でもなんなりとお申し付けください」

病院ぐるみー！！院長さんかなり深く礼しちやってるよ・・・ど  
んだけ雲雀さん偉いんだ？

それに生贄って確実に殺されるじゃん！！

雲雀「じゃあそろそろ寝るよ。ちなみに僕は葉が落ちる音でも目を覚ますから」

院長「では失礼します」

え・・・うそ！！ゲームスタート！？

マジですか・・・

オレが絶望的危機に陥っているときいきなりドアが開いた

そこから入ってきたのは・・・

雲雀「ん・・・やっと来たか。遅いよ麗」



麗「せっかく見舞いに来たのに文句言わないでよ。何で私が・・・  
な、何で沢田綱吉までいるの・・・!?!?」

4か月前に転校してきた雪風麗だった

標的15 並盛中央病院（後書き）

ツナに麗のことがばれてしまうのか!?

その流れについては磁界をお楽しみに（\*^|^\*）

## 標的16 恭弥と麗

side 雪風麗

麗「な、何で沢田綱吉までいるの〜!？」

この病院にいることは知ってたけどまさか雲雀恭弥と一緒に部屋にいるなんて……

それに雲雀恭弥のやつ私に来るなり遅いとはなんだ！無駄に態度がでかい

まあ、雲雀恭弥を入院させる原因をつくったのは私だから文句は言えないけど、ムカツク

ツナ「え……何で麗さんが雲雀さんの病室に……？」

雲雀「小動物は静かにしてくれろ？それより麗、君のおかげで入院するはめになったんだから毎日見舞いに来るのは当然じゃないか。なんか文句ある？」

麗「もちろんあ……りません……（っち）」

あると言おうとしたらトンファーを構えやがった・・・卑怯者！！

それにしても雲雀（もう呼び捨てでいいや）の前にいるやつら完全に伸びてるな。これが病人のすることか？

雲雀「今舌打ちしたでしょ・・・まあいいや。風邪で休んだ分の仕事は麗にも手伝ってもらおうから」

麗「なんで〜」

雲雀「こうなったのが君のせいだから」

麗「うっ・・・わかったよ。一日だけだからね」

まあ、あそこでわけのわからないような顔をしている沢田綱吉はほっといてなぜ雲雀が入院しているのを私のせいになっているのか説明しよう

原因を作ることになったのは3日前の放課後だった

私はすごくイライラしていた

なぜかというとりボーンが私を雪の守護者にすることをなかなかあきらめてくれないからだ。そして第一の理由は……

こいつら、風紀委員がしつこいこと!!

雲雀の差し金かどうかはわからないけど毎日毎日昼休みや放課後に待ち伏せしてくる。話を聞いたら風紀委員に雲雀が推薦して言うから入れの一点張り。正直目障りなんだよね

それに風紀委員に入れて……絶対いやだ!!

そんなことを思いながら風紀委員とにらみ合っていた

風紀委員「いい加減あきらめて風紀委員に入ったらどうだ？せつかく雲雀さんが

誘っているのに……これは名誉なことだぞ！」

麗「しつこいな……絶対やだって言ってるじゃん」

何が名誉だ……そんなのちっとも嬉しくない！！

麗「入る気は一切ないので帰らせてもらっていいですか？」

風紀委員「雲雀さんは何日も待っているのだ。そろそろ決断してもらわなくては」

うち……私がおとなしくしているからって調子に乗りやがってそろそろ痛い目見してもいいかな。そしたらいい加減あきらめるだろ

風紀委員「……！」

ん？どうしたんだ？風紀委員の空気かわった……何かあったのか？

風紀委員「ひ……雲雀さん!!わざわざこちらまでいらしたの  
ですか!?!」

雲雀「君たちが遅いからだよ。のろいやつはいらぬ。3秒待つ  
からここから消えてくれる」

風紀委員「は……はいっ!」

うわぁ〜本当に3秒で行っちゃたよ。速いな……

麗「風紀委員もいなくなったし帰るか」

突然だが今日は雨が降っているのだ。だからさっきまでのやりと  
りをしていてびしょぬれ……

早く家に帰って風呂に入りたいな〜

そう思いながら校門を出ようとしたときだった

雲雀「ねえ、雪風麗。いつまで僕をこの雨の中立たせておくつも  
りだい?」

麗「……」

雲雀「はぁ……君はいつたい何様のつもり……」

麗「！！分かった、分かった。無視はしないからそのトンファーはしまつて！」

私が校門を出ようとした瞬間トンファーを構えて戦闘態勢に入っていた

気付いてはいたけどやっぱ無視はダメか……

雲雀「もう聞いていると思うけど風紀委員の仕事は……」

麗「……は？何言ってるの！？私は風紀委員に入る気なんてサラサラないんだからね！」

雲雀恭弥のやつ勝手に話進めやがって……あんだこそ何者だつ  
つうの

雲雀「君に拒否権はないよ。そもそもこのぼくがわざわざ君のところまで来て風紀委員の仕事を教えているんだ。それこそありがたく思っほしいな」



麗「……………私がおとなしくしていれば調子に乗って……………」

雲雀「このぼくにくちごたえする気がい？」

麗「……………（ブツチ）あぁ〜もうございんだよ!」

私の怒りが頂点に達したときつい“能力”を使ってしまった

雨が降っていたので効果がいつもより増してしまった。しかもイラついていたので手加減をしていなかった

我に返ったときは雲雀は全身を氷づけにされていた

麗「ど、どうしよう……………ついやっちゃったよ」

とりあえず雲雀の周りにあつた氷を溶かして……………あつ!ほかの生徒に見られてないよね……………?

周りを見てみたけど私と雲雀以外の生徒はいなかった

雲雀「……………ん。いったい何をした？」

麗「よかった・・・生きてた」

雲雀「勝手に殺さないでくれる？それにしても寒い・・・」

ああ、よかった・・・人殺しにならなくて

このままにしているても雲雀が凍死しそうだったから応接室まで連れて行って寝かせた

その翌日に聞いたことだが雲雀が生まれて初めて風邪をひいて入院したらしい。そして懲りずに風紀委員が来たと思ったら雲雀の伝言を伝えに来たという。その内容は・・・

“雪風麗、君のせいで風邪をひいたんだ。必ず毎日お見舞いに来るよつに。”

来なかったら噛み殺すからね”

という事で私は雲雀の見舞いに毎日来させられている

雲雀の病室に沢田綱吉がいることは予想外だったがあいつはバカだから何とかなるでしょう

ツナ「雲雀さんと雪風さんって知り合いだったんだ・・・」

雲雀「うるさいよ。小動物は黙っててくれる？」

ツナ「す、すみません」

麗「雲雀さんそんなこと言ったらだめですよ」

雲雀「ムツ・・・君に言われたくないよ」

そんな会話をいくらかした後とても気まずそうな沢田を残して病

室を出て行った

病院を出たときに空から爆発音が聞こえたけどまあ、気にしないことにした

標的16 恭弥と麗（後書き）

いったい麗の能力ってなんなんですかね・・・？

これで雲雀と麗をからめやすくなりました

雲雀は意外と麗のことを気に言っていたりして（＃＾・＾＃）

今回はどんな話にしようかな・・・

標的17 雲雀の意外とツナ不幸（前書き）

今日は24時間テレビに少しだけ出てしまいました・・・

ほんのちょっとですけどね

そんなにテンションが上がっている音無です!!!

## 標的17 雲雀の意外とツナの不幸

Side 雪風麗

麗「あゝくそつ。雲雀のやつ結局退院するまで毎日見舞いに来させやがって。私もそんなに暇じゃないつーの。はあゝ毎日会っていたせいでこっちも大変なことになっちゃったじゃないか」

今私は自宅のベッドで寝ている

11月21日 時刻は昼の1時

本当なら学校にいらなくてはいけないのになぜ自宅のベッドで寝ているのかというと・・・

麗「雲雀のせいで私まで風邪を引いたんだゝゝゝ!!!」

雲雀「いきなり何叫んでるの?」

麗「何で雲雀がいるの?ここ私の家ですよね・・・?」

雲雀「そつだよ。そんなことも分からないの?かなり重症みたいだね」

よし……一回整理してみよう

雲雀が退院したと同時に私が風邪をひき学校に欠席届を出した。その翌日誰かが家のチャイムを鳴らしディーノだと思い込んだ私がドアを開けると雲雀がいた。おかしいと思い一回ドアを閉めもう一回開けるとそこにはディーノが……ではなくやはり雲雀がいた

そして雲雀は何事もなく部屋に入ってきて今この状態にいたると……よしっ、整理完了!

じゃない!!!

何で雲雀が私の部屋に!!!あきらかにおかしいでしょ!!!

麗「っていつか何で私の家を雲雀が知ってるの!?!」

雲雀「さっきから何で呼び捨てになってるの?」

麗「そんなことはいいからどうして!?!」

雲雀「まあいいか。こつちも麗って呼ぶし。住所はパソコンで調べた。風邪については並盛中央病院の院長に聞いた。僕の風邪がうつったと聞いてお見舞いにね……」



麗「余計なお世話だ!!」

雲雀「僕の行為を余計なお世話だと・・・」

麗「すみませんでした。家の中で暴れないでください」

何かあるたびにトンファーを出すのはやめてほしいな・・・

家の中壊されても困るし

それにしてもなんで見舞いに来るんだろう?いくら雲雀のせいだからといって見舞いに来てもらう義理はないのに。変なもの食べたとか・・・

雲雀「さつきから何不満そうな顔してるの。せつかく来てあげたのに」

麗「誰も頼んでないし」

雲雀「ねえ、君っていったい何食べてるの?」

麗「なによ、いきなり」

雲雀「台所に食べ物とは思えないものがたくさんあったから」

麗「勝手に見たのか!？」

雲雀「せっかく見舞いに来てあげたのに寝るからだよ。ほかにもいろいろ見させてもらったよ。それより君ってまともな料理できないの?」

麗「うるさいな・・・メニュー通りにつくってもなぜか失敗するんだよ」

もったいないから一応食べるけど味は微妙。ときどきおなかを壊すときがある

たまにリポーンが来て私の分も作ってくれるけど1年の半分ぐらいは買ってきたやつかな・・・

雲雀「ふうーん・・・じゃあ僕は出てくよ」

麗「ん・・・じゃあね」

やっと帰ったか・・・

でもひとりだとなんか・・・ときどき不安になるときがあるんだよな

まあ、暇だし寝よう

ん・・・良い匂いだな

リボンが来て何か作ってくれたのかな

雲雀「起きた？」

麗「な・・・なんで！？帰ったんじゃないの？」

雲雀「出ていくとは言ったけど帰るとは言ってないよ。それにしてもよく寝るね」

麗「うるさいっ！ほかにすることないから仕方ないの！」

雲雀「じゃあ、これでも食べたなら？」

そう言っつて雲雀はいろんな野菜の入ったおかゆを出してきた

麗「これ、雲雀が作ったの！？うわぁ〜おいしそう！〜いただき  
ます！〜」

一口食べると野菜の甘みがあつてとてもおいしかった。しかも野菜が食べやすいように細かく切つてあつた。雲雀にしては気遣いがすぎるような・・・まあいいか

雲雀「・・・フツ」

麗「何か言つた？」

雲雀「別に。それより早く食べなよ」

麗「うん！〜！」

それからおかゆを全部食べて雲雀にお礼を言つてから帰した

雲雀は強引で意地っ張りだけど優しいところあるじゃん

それに、台所。あれだけ散らかってたのにきれいになってる

意外と家事できるのね・・・うらやましいな

---

S i d e 雲雀恭弥

今日は疲れた

でも、麗のやつ僕の作ったお粥あんなにつれしそうに食べて・・・

意外と子供っぽいところがあるんだな

子供は嫌いだけど麗はまだいいか・・・

---

そのとき、シナたちはとうとう・・・

side 沢田綱吉

今日も雪風さん休みなんだな・・・雲雀さんもないし

先生「次の問題を・・・沢田、解いてみる」

ってこんなことを考えてる所じゃない!!

今日は授業参観だ。あれだけ来るなって言ったのに母さんは来るし・・・

ああ、どげしどげし・・・

山本はあてずっぱうであててたし、オレもいけるかな

ツナ「9!?!」

パコーン！！

いったゝ！なんだ・・・？

投げられたものを見てみるとそれはぞうりだった

リポーン「物騒よねゝ」

リポーンの声がして後ろを振り向くとなんかキモイばあちゃんがいた（リポーンが変装した姿だけ）

あ・・・！ぞうり投げてきたってことは、オレの答えが間違ってるからか・・・ってことは

次間違えたら殺される・・・！

先生「沢田どうした？」

ツナ「いや・・・あの・・・」

ランボ「はい！100兆万です」

ツナ「ランボ！！」



ツナ母「ごめんなさい。うちの子たち何です」

ツナ「母さん！」

ああ・・・ランボがオレの関係者だつてばれたうえに変な誤解をされることになった・・・

しかもその後はビアンキが来て獄寺君が保健室に運ばれたし、ついて行った先生の代わりにリポーンが教えることになって大変なことになったし・・・

今日もオレついてね〜

そういえば、放課後に雲雀さんを見かけたけど何か機嫌かよさそうに見えたな・・・

なんでだろう？

標的17 雲雀の意外とツナ不幸（後書き）

もしかして雲雀さんって麗のこと・・・

この後2人の関係はどうなっていくのか！？

相変わらずのツナは麗に認められる日が来るのか！？

次回もお楽しみください！！

## 標的18 ランキングフウ太の話

sideフウ太

ぼくは『ランキングフウ太』って呼ばれる情報やなんだ

ぼくの持っているランキングブックを狙っている悪いやつらから逃げているんだけど、途中学校でツナ兄にいにあってかくまってもらうことになった

ツナ兄は頼まれたら断れない人ランキングで堂々の1位なんだよ！

それに、野望のないボスランキングも1位だからランキングブックをとられる心配もないんだ

ぼくを追っているトッドファミリーは狂暴性ランキング7位のファミリーなんだけどツナ兄大丈夫かな？

不安だったけどツナ兄ってすごいんだよ！！

ぼくが捕まりそうになったときトッドファミリーの人たちを倒してくれたんだ！戦闘ランキング最下位のツナ兄がだよ！

ぼくのランキングが外れたのは初めてだったな・・・やっぱりツナ兄ってすごいんだな

ツナ兄のそばでもっと感動したいから並盛町にいることにしたよ！

s i d e 沢田綱吉

---

フウ太がオレの家に来てから3日目

学校へ来ては声をかけてくるしどこからか現れるし・・・

正直オレに恨みでもあるのかって聞きたくなるぐらいだよ

ディーノ「よお、ツナ！」

ディーノさんの声がしたからドアをみるとディーノさんの部下がゾ

ロゾロと入ってきていた。何回見てもこの光景にはなれないな・・・

ディーノ「元気にしてたか？んつ、こいつは正真正銘のランキング  
フウ太だ。

いざさがそーったつてしっぽすらつかめねー星の王子様  
だ。」

フウ太「こんにちはは、跳ね馬ディーノ」

ディーノ「よろしくな。それにしてもツナ、こいつに慕われるとは  
たいしたもんだぜ」

子どもに好かれることがそんなにすごいことなのかな？

ディーノ「フウ太、早速だが商談だ。あるマフィアのランキングを  
売ってほしい」

え〜！！ディーノさんがフウ太に頼みごと！？

もしかしてフウ太ってとってもすごいマフィアとか・・・

しかもディーノさん、情報料とかって言ってフウ太にケースいっぱ  
いのお金を渡してるし！

フウ太「お金はいらない。ディーノは住民を大事にしているランキング

ナ兄の 堂々の1位だからね。そーゆーボスは好きさ。それに、ツ

兄は「 兄貴分つてことはぼくの兄貴分でもあるだろう？ディーノ

ディーノ「！！オレはいい弟分を持って幸せだぜ。感謝するぜフウ太、ツナ！」

フウ太「はい、これランキングのコピーね」

ディーノ「サンキュー。急いでるんでまたな」

それにしてもフウ太がディーノさんに一目おかれるほどすごいやつだとは思わなかった。そーだよな、考えてみたらランキング100発100中なんだもんな

sideフウ太

ツナ兄のところに来てから毎日が楽しいな

学校ではツナ兄のためっぷりが発揮されてるけど退屈しなくていいな

そういえば、この前ディーノ兄がツナ兄の家に来てたなあ・・・仲  
がいいのかな？

ツナ兄の家ではハプニングがいっぱいなんだよ

たとえばとっても苦しい毒殺ランキング128技中3位のビアンキ  
姉ねえのポイズンクッキングで作られたクラッカーを食べさせられたり  
雪合戦ではイーピングが爆発したりいろいろ大変なんだ

でも、京子姉やハル姉、ツナ兄のお母さんやたくさんの人たちとは  
しゃいで楽しいよ

あ・・・雨が降ってきた

ぼく、雨って苦手なんだよね・・・

ランキングがでたらめになっちゃう

そういついごとでまたね！



s i d e デイノ

ランキングフウ太

かわいかったな・・・

それにしてもツナのやつフウ太に好かれるなんて・・・うらやまし  
いな

獄寺「跳ね馬じゃないっすか」

デイノ「ああ、獄寺か。そういえば今、ツナの家ランキングフ  
ウ太が来てるぜ」

獄寺「あのランキングフウ太っすか？今すぐ10代目の家につて来  
ます！」

最近の若者は元気だな

そろそろ帰って早く問題を済ませなければ・・・

この後ツナの家では大変なことになっていた

ツナの周りのたくさんの方のマフィア関係者が集まる中、かげではある人物が動き始めていた

そして半年がたった

その間にもツナには様々なハプニングやトラブルがあった。アルコバレーノやほかのファミリーなどたくさんの人にあっていたがいまだにボスを継ぐ気はなかった

一方麗はといてなぜか雲雀との交流が多くなってきている

ツナとはクラスメイトとして話すようになっていたが麗も雪の守護者を引き受けるつもりは一切なかった

そんな中、並盛町ではある不思議な事件が起こっていた

標的18 ランキングフウ太の話（後書き）

このまま書き続けているといつ戦闘シーンに入るか分からないので  
少し原作をとばして書いていこうと思います

皆さまの好きなシーンをとばしていたら申し訳ありません（・|・）

しかし、どのシーンも面白くなるよう頑張っていきます！！

標的19 連続暴行事件(前書き)

2学期が始まりテンションの下がっている私ですが小説のほうは頑張った行きたいと思います!!

## 標的19 連続暴行事件

side 雪風麗

私が転入してきてから10カ月

意外と早いものだなと思う

沢田とは友達として普通に話すようになったけれどボスとしては認めていない

それよりも、私はこの状況が気に入らない。今に始まったことではないが納得がいかないんだよね・・・

麗「雲雀、何で私が手伝わなきゃいけないの？」

私は雲雀と一緒に不良（雲雀いわく並盛の風紀を乱す人）を退治？していた

雲雀「あたりまえじゃないか。君は風紀委員「じゃないから」なんだから」

一応、即否定の言葉を入れたが聞いてはいないだろう

雲雀はここ3カ月私を風紀委員の仕事に誘ってくる（迷惑なだけ  
れど・・・）

もちろん、向こうには悪気はないみたいだけどほぼ毎日のように誘  
ってくるからときどき逃げる。でも次の日にさっぼったからって噛  
み殺すとか言ってくるから逃げるのはあきらめた

雲雀「君もストレス発散にはなるだろう」

麗「ん、若干スッキリはするけど・・・ってまさか雲雀は

ストレス発散のために噛み殺すとか言って襲うのか!？」

雲雀「並盛の風紀を乱されることがぼくのストレスになるんだ。

その原因を噛み殺して何が悪いんだい？」

麗「雲雀に質問した私がバカでした」

あいつの思考回路はどうなっているのか知りたいよ・・・

風紀委員「うっ……くはっ!」

と  
うっ

風紀委員「うっ……」

?「よえーよえー。風紀委員恐るるに足らず!」

2人の男の前に風紀委員が1人ボロボロになって倒れていた

風紀委員「貴様ら……何者だ……」

？「んあー？遠征試合にやってきた隣町ボーイズ？」

？「それつまんないよ。早く済ましてよ犬<sup>けん</sup>」

？「こいつ何本だっけか？ちよっくら頂いてくびよーん」

そう言つて1人がポケットからペンチをとりだした

風紀委員「な、何をする気だ！？」

？「恨まないでね。上の命令だから」

風紀委員「や、やめる・・・」

？「ほい」

風紀委員「うぎゃあああ！！！」



side 沢田綱吉

---

ツナ母「並中大丈夫なの？また襲われたらしいじゃない」

ツナ「何それ？」

オレは起きてからいきなり母さんに言われてキョトンとしてしまった

リポーン「この土日で並盛中の風紀委員8人が重傷で発見されたんだぞ。

やられた奴はなぜか歯を抜かれてるんだ。全部抜かれた奴もいたらしいな」

ツナ「え〜〜!!マジで!?!な・・・何でこんなことをするんだ?」

リボン「さーな」

ツナ母「ねーツナ、護身用に格闘技でも習ったら?」

ツナ「なんでそーなるんだよ!!」

「たく母さんはすぐ何かをさせたがるんだから・・・」

それに不良同士のけんかなんだから俺には関係ないよ

それにしても風紀委員ばかり襲って何の意味があるんだろう?

疑問が残りながらオレは登校していた

リボーンに京子ちゃんのお兄さんからボクシングを習えって言われたけど、絶対にスパルタで殺される

そんな会話をしていたところに風紀委員の姿が目に入ってきた

よく見たらあちこちに風紀委員がいる

ツナ「なあ、リボーン。どうして風紀委員がこんなところにいるんだろう?」

リボーン「そりゃあ、あんな事件が多発してるんだ。ピリピリもするぞ」

ツナ「やっぱり不良同士のけんかなのかな?」

雲雀「違うよ」

ツナ「雲雀さん!」

な、何で雲雀さんがこんなところにいるんだ!?

リボーン「ちゃおっす」

ツナ「お、オレはただ普通に登校してただけで・・・」

雲雀「身に覚えのないイタズラだよ。

もちろん、降りかかる火の粉は元から断つけどね」

や、やっぱり雲雀さんはこえ〜

緑〜たなびく並盛の〜

ん？なんか歌のようなものが聞こえる・・・

大なく小なく並〜がいい〜

よく聞いてみるとうちの校歌だ

ピッ

ピッ？

いったいどこから・・・！！

雲雀さんをみると携帯を出して話していた

ま、まさか・・・今のって雲雀さんの着メロ？！？

もうこんな空気嫌だ！早く行こう・・・

ツナ「じゃあ、失礼します」

雲雀「君の知り合いじゃなかったっけ。笹川了平・・・やられたよ」

ツナ「・・・！！」

お兄さんがやられた！？

は、早く病院に行かないと！！！！

side 雲雀恭弥

---

沢田綱吉・・・行ったか

さてと、ぼくはさっさと仕事を済ませよう

雲雀「麗、行くよ」

麗「つたく、人使いが荒いな・・・そんなにピリピリしなくていいでしょ」

雲雀「並盛で勝手なことをしてたんだ。それなりの罰を受けてもらわないとね」

麗「はいはい、分かったよ。それじゃあ行きますか・・・敵陣へ」

雲雀「君が仕切らないでよ」

麗「はいはい」

雲雀「じゃあ、いっこうか」

並盛の風紀を乱すやつは誰であろうと許さない

必ず噛み殺してあげる

こうして、麗と雲雀は今起こっている事件の犯人のところへ行くことになった

## 標的19 連続暴行事件（後書き）

次回、麗と雲雀はあいつに会うのか!?

裏で動きだした何者かがツナたちボンゴレファミリーに迫る!

やっと戦闘シーンに入れるかも・・・

ここまで来るのにとっても長かったです



## 標的20 笹川了平襲撃

side 笹川了平

今俺はわけあって並盛中央病院に入院している

ツナ「お兄さん！大丈夫ですか！？」

了平「おー沢田、早いな。情けないがこのざまだ」

沢田がここに来たっていうことはそろそろ京子も来るのか・・・

沢田も心配性なところがあるからな、少し大げさなのだがこのくらのケガどうってことない！！

リポーン「ケガの具合はどうだ？」

了平「骨を6本折られて7ヶ所にヒビ、そして・・・

見る、歯を6本もっていかれた・・・」

ツナ「ああー！」

了平「といってもボクシングで折っていてもととさし歯なのだが」

ツナ（笑っていいのやら・・・）

反応が薄いな・・・気を遣わせてしまったか？

まあ、もっていかれたのが歯でよかったな。しかしあの男・・・

リポーン「襲ってきたやつ顔を見てるか？」

了平「ん？見てるぞ。あの男、油断していたといえ恐ろしく強い男だった」

ツナ「犯人見てるんですか！？」

了平「ああ。奴は俺の名を知っていた。そしてあの制服は隣町の黒曜中のものだ」

ツナ「ええ〜！！中学生ですか？」

うむ。沢田が驚くのも無理はない

あの男にあったのは朝のロードワークをしているときだった・・・

ロードワークをバカにするなよ。朝のロードワークは極限のパワーがみなぎってきてなとても気持ちがいいんだぞ！！

まあ、その途中だった。いきなり声をかけられてな

黒曜中・犬「ねーねー、あんた笹川了平？」

黒曜中の制服を見て、てつきり我がボクシング部に入部するつもりだったが間違えて他校に入学してしまったあわてん坊だと思い込んでしまったのだ

他校でも俺はかまわんからこう言ったんだ

了平「ボクシングへの愛さえあれば入部大歓迎だ！」

と。そしたら

犬「じゃーそれでいいや。オレを倒したれ入部してあげる」

嬉しそうに見えたんだがな、オレを倒してからどこかへ行ってしまった

それにしても強かった。あの男のパンチ・・・

了平「我が部に欲しかったー!!」

ツナ「こんなときでもボクシングの話ですか!？」

おお、沢田ナイスつつこみだ

了平「話は変わるが京子にこのことを正直に話していない。

あいつすぐ心配するんでな、口裏を合わせといてくれ」

ツナ「えっ・・・」

もう京子には心配させぬと誓ったのだ。絶対にばれてはいけない

京子「お兄ちゃん!! どうして銭湯の煙突なんて登ったの!？」

早速、あわてた京子がオレの病室に入ってきた

煙突に登っていたら足を滑らせセンサーが言ったとあってある。京子は少し納得していなかったが最後は

京子「でも、生きててよかった」

と泣きながら言ってくれた

本当に京子は心配性だな・・・

---

side 沢田綱吉

お兄さんと京子ちゃんを2人つきりにさせるためにオレは病室を出た  
それにしても何でお兄さんがやられてるんだ!?

襲われているのは風紀委員のはずじゃなかったのか!?

オレはパニックっていた

リボン「パニックってるのはツナだけじゃねーな」

ツナ「!?!」

周りを見てみると病院には並盛中の生徒がたくさんいた

ツナ「何でこんなに並中生がいるの〜!?!」

リボン「おそらく、襲われているのは並盛中の生徒だけだったことだな。

しかも、無差別にだ」

ツナ「何でそんな恐ろしいことに!?!」

草壁「では、委員長の姿が見えないのだな」

明日は我が身だと思っっているときに風紀委員副委員長の草壁さんの

声がした

委員長「つてたしか雲雀さんのことだよな？でも姿が見当たらないってことは……」

まさか、そんなわけないよ……たぶん

風紀委員「ええ、いつものように敵の尻尾をつかんだかと思われま  
す。」

これで犯人側の壊滅は時間の問題です」

草壁「そうか」

え……今雲雀さんが敵を倒しに行ったって言ってたよな

ってことはもう心配ないんじゃない！

雲雀さんと同じ中学でよかった！

リポーン（そう簡単には行かないぜ……）



---

s i d eリボーン

今並盛では並中生のみ襲われるという奇妙な事件が起きている

そんな中、了平の見舞いに行って病室を出てからレオンの尻尾が切れた

レオンの尻尾が切れるということは何か不吉なことが起こる

医師「そこ！どきなさい！」

突然言われて振り返ってみると急患が入ったようだ

よく見てみると見覚えのある奴だな・・・確かあいつは

ツナ「く、草壁さん!？」

風紀委員副委員長か

今まで襲われた奴は全員歯を抜かれていた。しかも徐々に本数が減っている。もしかして……

ツナ「ちよっ、リボーン何してるんだよ」

オレは草壁の口の中を調べていた

そして予想通り歯を5本抜かれていた。これで確信が持てたぞ

ツナ「おい、リボーン!」

リボーン「ケンカ売られてんのはツナ、お前だぞ」

## 標的20 笹川了平襲撃（後書き）

最近体育大会の練習でバテている音無ですが今回も何とか書き終えることができました・・・

さて今回は了平中心に書いてはみたもののやっぱり難しいです

キャラの気持ちになって書いてみてはいるのですが口調とか性格を考えるとおかしいところがあるかも・・・（すみません）<|>（

## 標的21 黒曜ランド（前書き）

今日は学校の体育祭があつてへトへトです・・・

受験勉強も忙しくなってきたし生徒会の仕事はたまつてるし・・・

ああああと叫びたい気持ちの音無です

## 標的21 黒曜ランド

side 沢田綱吉

リボーン「ケンカ売られてんのはツナ、お前だぞ」

突然リボーンにそんなことを言われた

狙われてるのがオレ！？まさかそんなわけないじゃないか

ツナ「ケンカ売られてるってどういう意味だよー！」

リボーン「こいつを試してみる」

そう言って渡してきたのは何かが書いてある紙だった

ツナ「並盛中のケンカの強さランキング？これがどうかしたの？」

リボーン「おめ、は鈍いな。そのランキングをよく見てみる。襲われたメンツと

順番が一致してるんだ。奴らは歯でカウントダウンしてやがる」

確かにこのランキングと襲われた人は一致していた

でもこのランキングって・・・

ツナ「フウ太のランキングみたいじゃないか・・・」

リボーン「見たいじゃなくてそうなんだ」

ツナ「いったいどうなってるんだ・・・？」

リボーン「俺たちマフィアには『沈黙の掟』<sup>オルメタ</sup>というのがある。組織の秘密を絶対に

外部に漏らさないという掟だ。フウ太のランキングは業界全体の

最高機密なんだぞ。一般の人間が知るわけがない」

そんなにすごいランキングなんだ・・・

5位の草壁さんが襲われたってことは次は4位の人が襲われることになるんだ

えくと、4位の人・・・

リボーン「つまりこのランキングを入手できるのは……」

ツナ「あっ！！！」

ランキングの4位の人を見つけたときオレは驚きでリボーンの言っていることが聞こえなくなった

まさか、4位があの人だなんて……

リボーン「（気付いたか）ツナ、お前が行け。オレは気になることを調べる」

ツナ「オレ1人!?」

今私は雲雀と一緒に連続襲撃事件の犯人のアジトへと向かっていた  
どういう手を使って見つけたのかは分かんないけど雲雀がついて来  
いって言うから仕方なくついて行っている

麗「ねえ雲雀、いったい犯人は誰なの？」

雲雀「まあ、着いてからの楽しみだよ」

この通り雲雀は犯人を全く教えてくれない

麗「犯人教えてくれないんだったら帰っていい？」



雲雀「帰ってもいいけどそうしたらこの並盛で生きていけないと思  
ったほうがいいよ」

(こえ〜どんだけ権力あるんだよこいつ)

帰ろうとすれば殺されそうだからやめておこう・・・

それにしてもどこまで行くんだろう？もう隣町まで来ていたが一向  
にアジトといえるものが見えてこない

それからしばらく歩いていると廃墟らしき建物が見えた

麗「敵のアジトってここ？」

雲雀「そうだよ。さあ、行こうか」

麗「行こうかって私たち二人だけで乗り込む気！？無謀にもほどが  
ある！」

敵は並中の強いやつらをいとも簡単に倒している

やられた奴らを見ればわかる・・・敵は相当できる！！

いくら雲雀が並中最強だからといって敵の正体も知らず乗り込むな

んて馬鹿げてる

そう思っている間に雲雀はスタスタと廃墟へ向かって歩いて行っていた

麗「ちょっと、まってよ！話を聞けって！」

雲雀「……………」

麗「無視ですか……………」

まあ、雲雀が人の言うことを聞くわけがないか…………

いつもあいつには振り回されるな。あいつに付き合ってる私もバカだよ…………

s i d e 雲雀恭弥

---

さつきから麗がごたごたうるさいな

まあ、いいか

麗「ちよつと待ってよ！」

雲雀「君が遅いからだよ。早くしなよ」

ぼくたちは閉鎖した黒曜センターまで来ている

目的はもちろん連続襲撃事件の犯人を噛み殺すためだ

麗はさつきから相手の正体がわからないのに無謀だとか言ってるけど相手がだれであろうと僕には関係ないね。結果は目に見えているのだから

雲雀「ここが入り口か・・・」

麗「もう、やるんだったらさっさと殺ってよね」

麗は帰るのをあきらめたようだ

雲雀「行くよ」

黒曜センターの中の階段はほとんど壊されていた

残っている階段はおそらくひとつだろう

麗・雲雀「・・・!!」

黒曜生「貴様ら何者だ！」

歩いていたらいきなり声をかけられた

黒曜生か。相手はおそらく30人ほど・・・まあ、何人いても関係ないけどね

side 黒曜生

---

俺たちが黒曜ランドの見回りをしていた時だった

2人の男女の声が聞こえた

黒曜生「侵入者だ。相手は並中の男女2人」

黒曜生「どうする？」

黒曜生「迷い込んだものかもしれない。確かめよう」

話し合いの結果、確認するために声をかけに行った

黒曜生「貴様ら何者だ！」

2人が一瞬だけびくりした顔をした。少しきつく言いすぎたか

無関係のものかと思ったとき男のほうがあった

雲雀「向こうから出てくるとはね。手間が省けた」

黒曜生「・・・!!」

こいつらは敵か!!

麗「めんどくさいことになってきた・・・」

ということとは女のほうもか!

女もいるからって油断した

黒曜生「侵入者発見！直ちに排除せよ！！」

俺たちは35人、相手は2人。しかも1人は女だ

すぐに終わらせてやる

黒曜生「男のほうに25人、女のほうに10人むかえ！！」

素早く指示を出した

あっという間に2人を囲い、勝ったも同然だった

麗「女だからってなめられたものね。まあ、楽だからいいか」

そんなことを言っている余裕はないぞ

俺たちは強い。女1人でどうこうできる問題じゃない

雲雀「そもそも、35人でぼくたちに挑もつってというのが間違ってるね。

しかも、草食動物ばかりじゃないか。僕は興味ないね」

黒曜生「おとなしく聞いていれば・・・俺たちをなめるなよ！！」

一斉に襲いかかった

皆、ナイフや金属バットなどの武器を持っていた

しかし、相手はひるむ様子が一切なかった

• それどころか2人は笑っていた。戦いが楽しいと思うかのようだ。



相手は35人。私の相手をしてくれるのは10人か・・・

なめられたものね・・・

戦いは別に嫌いじゃない。だけど無意味な戦いはしない

もう仲間が傷つくところは見たくない。もう仲間を失いたくない

でも戦う前のあの緊張感。勝利した時の気分は自分でも驚くぐらいに最高だ

だから、雲雀にいろいろと連れまわされてるけどいやではなかった

黒曜生「かかれっ!!」

1人の掛け声で10人が一斉に襲いかかってきた

向こうはナイフや金属バットを持っている。私の武器はなし

黒曜生「女は何も持ってない!さっさと済ませるぞ」

女だからなめられるのも当然だけどなんかむかつくな

軽い傷程度で済ましてあげようと思ってたけどやめた。本気で殺ろう

黒曜生「うらあー！」

一斉に私をめがけて振りかぶってきた

私は低く姿勢をとりバットが振り下ろされる瞬間飛び上がった

黒曜生の頭の高さまでジャンプした

黒曜生「・・・！！」

黒曜生は何が起こったのかわからずただ突っ立っていた

麗「女だからってなめてんじゃねーよ」

空中で体をひねりながら黒曜生の顔めがけて蹴りをかました

7人にヒットし気絶させた

変な音がした奴もいたけどまあいいか

黒曜生「この女、強いぞ。おい！男のほうはどうだ！！」

私の強さが想像以上だったのかなり焦っている様子だ

そんなによそ見している暇があったらさっさとかかってくればいいのに

もうこっちの体制は整ってるっつうの

麗「少しは自分の身の心配をしたら？あんだ達あと3人だよ」

黒曜生「・・・！！やつ、やめる！！」

ガンツ

バキツ

ボキツ

ドサドサツ

残りの3人は倒した黒曜生のバットを借りてあっさりと倒した

全く張り合いのないやつら・・・ウォーミングアップにもなんないや

まあ、こっちは完了っつと

麗「雲雀、そっちはどう？」

雲雀「こんな奴らゴミ虫以下だね。分かっていることをいちいち聞かないでくれる？」

麗「だって、雲雀のほうが私より人数多かったし」

少しふざけた調子で行ってみる

雲雀「麗、ぼくのことなめてない?」

麗「そんなことないよ」だって雲雀すごいし」

実際、25人いた黒曜生が現在目の前で屍の山を作っているし  
(全部雲雀がしたんだけどね・・・)

でも、雲雀のムツとした顔って可愛いな・・・

けっこういじるの楽しいかも

雲雀「麗、帰ったら覚悟しててね」

ちよっと・・・ってゆうかかなり怖いけど

side 沢田綱吉

---

どうしよう・・・

まさか、4位があの人だったなんて

急いで知らせないと

オレは並盛中央病院を出てから急いで並中へ向かっていた

フウ太のランキングにそって襲われているのだとしたら次の標的は  
君なんだ！！

どうか無事でいて・・・

獄寺君！！

標的21 黒曜ランド（後書き）

戦闘シーンいかがだったでしょうか？

やっぱりもっと詳しく書いたほうがよかったのかな・・・

ご意見があればぜひお願いします！！

## 標的22 獄寺隼人襲撃

side 雲雀恭弥

ぼくは麗と黒曜ランドに来ている

途中で黒曜生らしき人たちがいたがあんな群れで動かないと何もできない奴らは相手にするほどじゃなかった

その後も進んでいったがこの黒曜ランドには各階に階段が一つずつしかなかった

相手もバカではないらしい

でもこのぼくを怒らせたのだから噛み殺されるのは確実だね

さて、どうやって噛み殺そうか・・・

あっさり殺してしまうのはつまらない。じっくり痛めつけて恐怖をたっぷり味あわせよう

さっきから雲雀のやつ黙ってばっかなんだよな・・・

もしかして相手がさっきみたいな奴だと思って拍子抜けしてるとか

麗「ねえ、雲雀。さっきの相手だけどあいつらはたぶん黒曜生の中で一番

弱いやつらだよ。あいつらのボスはもっと強い。しかもかなりの強さだ」

雲雀「・・・・・・・・・・」

む、無視・・・？

麗「雲雀、聞いている？」

雲雀「そんなことはわかりきってるよ」



何だ聞いてたのか

そう言いながらスタスタと歩いて行く雲雀

この黒曜ランドには階段が各階に一つずつしかない

つまり、敵が現れるところを予測しやすいわけだ

雲雀も、もう少し用心して行ってもいいのに

麗「そういえば、敵のボスがどこにいるかわかってるの？」

雲雀「知らない」

麗「えっ!!!？」

知らないって、今までどこに向かって進んでたんだよ

上の階にどんどん進んでいくからってつきり居場所知ってるのかと思  
ってた……

でも、敵の居場所も分からずに進む度胸だけは認めよう……って  
言ってる場合じゃない!!

やっぱり雲雀は無謀すぎる

雲雀「ここだね」

麗「えっ・・・何が？」

いきなり立ち止った雲雀の前には扉があった

麗「もしかしてここって・・・」

雲雀「連続暴行事件の主犯がいるよ」

なんだかんだ言って雲雀のやつ敵の居場所知ってるんじゃないかよ!!

うそつきめ

麗「・・・ごめんなさい」

心の中で思ったはずなのに雲雀のやつ私をにらんできやがった

あいつは心の中まで読めるのか!?

つい謝ってしまったじゃん！

雲雀「じゃあ、行くよ」

麗「オツケ」

こうして私たちは敵と対面することになった

この後信じられない結果が待っていることを知らずに

オレは今並盛中にいる

しかし、この登校率の少なさは異常だ。クラスの半分も来ちゃいねー

それより、10代目が登校していないのが気になる

何かあったのだろうか・・・

あ・・・携帯の充電切れた

10代目も心配だし帰るか

そう思い席を立った

途中、先生にひきとめられたが無視した

商店街まで来たのはいいが何をしようか

獄寺「とりあえずメシでも食うか」

そう思い所持金を見たところ持っていたのは・・・

獄寺「ゲツ、65円・・・」

金もないのかよ

？「並盛中学2-A出席番号8番・・・獄寺隼人  
早く済まそう。汗・・・かきたくないんだ」

何だこいつ・・・

いきなり現れてオレの名前言いやがって、何か用でもあんのかよ

獄寺「んだてめーは？」

千種「黒曜中2年柿本千種<sup>かきもごちくま</sup>。お前を壊しに来た」

はあ〜

「たく、何でこう毎日他校の不良にからまれんだか

けっこう地味に生きてんのに・・・しかたない

獄寺「わーった、きやがね。売られたケンカは買う主義だ」

不良「おっ、中坊同士のケンカだケンカ」

不良「おもしれえじゃん」

周りにいた不良共が集まってきた

千種「……………見せものじゃないんで」

シュッ

プシャーッ

な、何だ!?

今何が起こった!?

あの千種つつう奴が腕を動かしたと思ったら不良共の頭に針がいくつも刺さっていた

何者だこいつ!?

獄寺「テメー何しやがった!!!」

千種「いそぐよ・・・めんどい」

ゾクッ・・・

何だこの寒気・・・こいつ、やばい!

また千種の腕が動く

反射的に横へ避ける

・・・!!

ほほにかすり傷ができていた。いったいあいつの武器は何なんだ!?

ここはひとまず様子を見るか

千種とは反対方向に向かって走り出す

角を曲がった刹那ダイナマイトを大量に千種へ向かって投げる。そして俺は物陰に身を隠した

やはり千種の腕が動く。そして、ダイナマイトの導火線が次々と切られていった

導火線を切ったと思われるものがそのまま俺が身を隠していたところまで来た

(ヨーヨー!?)

それはかなりの速さで回転しているヨーヨーだった

ヨーヨーには無数の穴が開いていた

(もしかしてあの不良共に刺さった針はここから・・・)

ビッ

そう思った瞬間ヨーヨーから無数の針が出てきた

後ろの建物が破壊される

その衝撃でオレは道路にはじき出された



獄寺「チツ・・・」

こいつ・・・ただの中坊どころじゃねえ

殺気といい戦い方といい本物の殺し屋だ!!

---

s i d e r i b o o n

オレは公衆電話でディーノと話しをしていた

リボーン「助かるぞディーノ。もし、問題の連中と同一人物なら

奴らが妙な手をつつてくるのも納得できるな。

脱獄したばかりでこちらの情報を持ってねーんだからな」

これから大変なことになるぞ

さて、どうする………ツナ!!

標的22 獄寺隼人襲撃（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます（T T）

さて、雲雀と麗はこの後どうなるんでしょうかねえ

それは次回のお楽しみということぞで・・・

## 標的23 黒曜生の目的

side 沢田綱吉

どこにいるんだよ、獄寺君!!

学校に行っても帰ったっていうし携帯に電話してもつながらないし・

無事なんだよな!?

女子高生A「あつ、並中生だ!」

そのとき、通りすがりの女子高生の声がした

女子高生B「無視無視。近寄らないほうがいいよ」

女子高生A「だよね。変に巻き込まれたくないし。

さつきも商店街を見た?」

女子高生B「なんか並中の子、黒曜の子とケンカしてたんでしょ?」

まさか、それって獄寺君のことじゃ・・・急がないと！

オレは獄寺君を探しに走りだした

---

side 獄寺隼人

獄寺「黒曜中だ・・・すつとぼけてんじゃねーぞ」

オレは、並盛商店街で黒曜中の柿本千種というやつと戦っている

あいつの戦い方・殺気は本物の殺し屋だった

ただの中学生じゃねえ

獄寺「てめえどこのファミリーのもんだ」

千種「やっと当たりが出た・・・」

当たり！？いったい何のことだ？

こいつの目的はいったい何なんだ

千種「お前にはファミリーの構成、ボスの正体、洗いざらいはいてもらっ

獄寺「なに！？」

狙いは10代目か！！

千種のヨーヨーがオレに向かって伸びてきた

後ろへ飛びギリギリで針を避ける

10代目が狙いだっつーならぜってーに食い止めねーと！！

獄寺「2倍ボム」

通常の二倍のダイナマイトを千種に向かって投げる

しかしヨーヨーの糸を使って導火線がすべて切られた

そのままヨーヨーは獄寺の左右へと向かって伸びていく

獄寺「くそっ・・・はさまれた！」

オレのスピードじゃよけきれねえ

できればこの技は使いたくなかったな・・・

そう思いながら腰に付いていた小さなダイナマイトを取り出す

獄寺「いくらチビボムだからってよ・・・」

チビボムに火をつけ自分のすぐ後ろへと投げる

千種「!？」

チビボムが爆発し爆風を利用して針から逃れる

獄寺「いてーんだよ！」

やっぱりこの技はいてーな

この勢いを利用して千種へと殴りかかる

獄寺「くらいな」

しかし千種は軽々とよける

千種「おそい」

獄寺「くそっ！まだだ！二倍ボム！！」

千種「芸のないやつ・・・」

ヨーヨーで導火線を切っていく

しかし、気付いた時にはいくつつかのダイナマイトが千種のそばまで  
きていた



千種（距離の計算はあってははず……どうして!?!）

顔のすぐそばでダイナマイトが爆発する

千種がよろめき顔や肩から血が噴き出す

獄寺「へへへっ、ザマあねーな。テメーは簡単な遠距離法のトリックに引つかかった

のさ。オレが二倍ボムのかけ声とともに通常のダイナマイトを放ったとき

すでに放っていたチビボムが通常のダイナマイトと同じ大きさに見えるほど

お前に接近してたのさ。ボンゴレなめんじゃねー。果てな」

千種に向かってダイナマイトを投げた

千種「!?!」

ドカ      ドカッ      ドカーン

まあ、けっこうやばかったが終わったぜ

同時刻・黒曜ランドで雲雀と麗は首謀者と対面していた

side 雲雀恭弥

廢墟の中の扉の前に僕は立っている。おそらくこの中には首謀者がいるだろう

さて、どうやって噛み殺そうか・・・

そう思いながら扉を開けた

雲雀「やあ」

首謀者「よく来ましたね」

これから戦う者どうしとは思えない会話だった

雲雀「ずいぶん探したよ」

麗「うそつけ・・・ここまで止まらず歩いてきたくせに」

雲雀「まず麗から噛み殺そうか」

麗「いや、遠慮します」

雲雀「君がいたずらの首謀者?」

首謀者「クフフ、そんなところですかね」

なんともいえない空気が漂う

---

side 雪風麗

私は部屋に入ったときの空気に違和感を覚えていた

この空気、相手は落ち着いていた。いや、落ち着きすぎていた

あきらかに戦い慣れしている

首謀者「クフフ」

麗「・・・!!」

首謀者が顔をあげたとき私は絶句した

首謀者の顔には見覚えがあった

過去のトラウマからか足が震える

あいつにだけは、六道骸だけには会いたくなかったのに！

### 標的23 黒曜生の目的（後書き）

次回はやっと雲雀と骸の戦闘シーンに入れそうです

麗の過去についてはいずれ書こうと思っはいますがタイミングが・  
・

とにかく、精一杯がんばります！！

## 標的24 六道骸

side 雲雀恭弥

雲雀「君がいたずらの首謀者？」

ぼくは目の前に座っている男に問いかけた

骸「クフフ・・・そんなところですかね。そして君の街の新しい秩序」

雲雀「寝ぼけてるの？並盛に2つの秩序はいらない」

骸「まったく同感です。ぼくがなるから君はいらない」

何を言っているのかなこいつ

君の願いは永遠にかなうことはないのに・・・

こいつにはぼくのストレス発散のために協力してもらわないと

制服から仕込みトンファーを出す

雲雀「君はここで噛み殺す」

さあ、楽しいゲームの始まりだ

しかし、骸は動く気配がない

雲雀「座ったまま死にたいの？」

骸「クフフ、面白いことを言いますね。立つ必要がないから座っているですよ」

いちいちむかつく奴だな

さつきから麗は一言もしゃべらない。少し足が震えているように見える

使い物にならないならいいや。放っておこう

雲雀「君とはもう口を利かない」

骸「どーぞお好きに。ただ、今喋るとかかないと二度と口がきけなくなりますよ」



雲雀「!!!」

なんだ・・・？

いきなり寒気がしてきた

骸「んー？汗が噴き出してきましたがどうかなさいましたか？」

雲雀「黙れ」

骸「せつかく心配してあげているのに。ほら、しっかりしてくださいよ。僕はこっちですよ」

雲雀「!!!」

足元がふらつく。一体とういうことだ!？

くそっ、意識が・・・

骸「海外から取り寄せてみたんですよ。クフフ、本当に苦手なんですな」

麗「……!!」

雲雀「……!!」

骸「桜」

室内が明るくなりそこに見えたのは大量の桜だった

私は雲雀とともに黒曜ランドへと向かい首謀者がいる部屋へと入った

そこにいたのは私が一番会いたくない人物であった

どうしてここに六道骸がいる。あいつは捕えられていたはずじゃないのか!?

骸「クフフ、本当に苦手なんですわね・・・桜」

雲雀「・・・!!」

しまった!

ポーとしてしまっていた

気付いた時には部屋一面に桜が咲いていた

やばい!! たしか雲雀は桜に弱かったはず

あのクソ医者に「サクラクラ病」をかけられたんだった

しかし、なぜいきなり桜が・・・

雲雀「くそっ・・・」

麗「雲雀！大丈夫なの！？」

雲雀はふらついてもう立てはられない状態だ

片膝をついていて呼吸が荒い

骸「クフフ、さっきまでの威勢はどうしましたか？」

麗「くそっ。何でここにいる・・・六道！」

雲雀「君たちは知り合いか・・・」

麗「雲雀には関係ないことだ。口を出さないでもらいたい。

それに今、雲雀は動ける状態じゃないでしょ」

雲雀「ふんっ・・・えらそ・・・うに・・・」

骸「おや？見たことのある顔と思っていたら・・・クフフ、そういうことですか

元気にしていましたか？雪風さん」

麗「うるさい！・・！どうやってあの監獄から抜け出した！？なぜ貴様

がここにいる!？」

骸「クフフ、あのような場所抜け出すことは容易なことですよ」

この桜、どうにかして消すことはできないだろうか・・・

私の能力を使ってもいいが今ここで使うと弱っている雲雀が耐えきれぬかどうかわからない。もし耐えきれなかったら命が危ない

あの桜が出てきてから何か違和感がある・・・何でだ？

くそっ・・・わからない

骸「さて、そろそろこちらからも仕掛けましようかね。心配しなくていいですよ。

今ここで命をとるようなことはしません。順番どおりにしないと面白くない。

そうそう、君たちはボンゴレについて何か知っていますか？」

麗「そんなこと知るか!」

骸「そうですね。でしたら君たちには時が来るまでおとなしくしてもらいます」

麗「……!!」

この違和感の正体、分かったぞ

麗「雲雀、惑わされるな。この桜は幻術だ！実際には存在しない」

骸「ほう……よく見破りましたね。でも遅いですよ」

ドカッ

雲雀「……くっ」

雲雀が部屋の端へとけられる

麗「しまった。おのれ、六道。どれだけ私を苦しめれば気が済む！  
」

骸「さっきからうるさいですね。少し静かになってもらいましょう」

麗「……いやだ。や、やめ……あ、ああああ……!!」

いきなり、麗が耳をふさぎ叫びだす

雲雀「麗・・・!?」

麗「いやだ！こんなのもう見たくない！やめてえー！・・・」

力尽きたのか床に倒れてグッタリとしている

雲雀「麗に何をした」

骸「やっと静かになりましたね。クフフ、次は君の番ですよ」

やっと雪風麗が静かになった

後はあの男だけ

骸「さて、終わらせましょうか」

骸は雲雀を殴り、蹴り続けた。血まみれになるまで

雲雀の意識が途切れかけてきたころ

骸「なぜ桜に弱いことを知っているのかっていう顔ですね。もしかして桜が

なければとか思っています？君みたいなレベルは何人も見てきましたよ。



地獄のような場所で・・・」

麗（いやだ……もうあんなことにはなりたくない……  
助けて……雲雀……）

こうして、雲雀と麗は六道骸に捕まった

一方ツナたちは黒曜中の柿本千種と戦っていた

## 標的24 六道骸（後書き）

さてこの後麗と雲雀はどうなるのでしょうか？

麗が叫んだ理由とは？骸が雲雀に見せたものとは？

（その内容をどう書こうかいまだに迷っています・・・）

標的25 千種vs獄寺決着(前書き)

おかげさまでアクセス数10000を突破いたしました！！

皆様が未熟な私の作品を読んでくださり本当に感謝しています(T  
T)

## 標的25 千種vs獄寺決着

side 沢田綱吉

獄寺君が黒曜生に狙われていると知ったオレは並盛商店街まで来ていた

ついさつき、向こう側の通りから爆発音が聞こえてきた

もしかしたら獄寺君が戦っているかもしれない・・・急がなきゃ

走って行った先にはボロボロになった建物と座っている獄寺君の姿があった

ツナ「獄寺君、無事でよかった・・・」

獄寺「10代目!どうしてここに?」

ツナ「いや・・・獄寺君が黒曜生の奴に狙われてるって噂みたいなのがあって・・・」

獄寺「そのためにわざわざ!!恐縮っす!今やっつけたところっす」

やっぱりリボーンが行っていたことは本当なんだ

それにしても振り返ちって・・・ほんと強いな

獄寺「その辺に・・・!!い、いない!!」

ツナ「えっ・・・」

獄寺君が差したところは黒い煙が上がっているだけで人影がなかった

じゃあ、どこに行ったんだ？

千種「手間が省けた」

ツナ・獄寺「・・・!!」

そこに立っていたのは全身血まみれの黒曜生だった

獄寺「まだ生きてやがったのか。気を付けてください。奴の武器は  
ヨーヨーです！」

ツナ「そんなこと言われても怖くて動けないよ・・・」

獄寺「な!?!」

千種がヨーヨーを放つ

オレは目を強く閉じてしまった

ツナ「ひいつ!?!?!?!」

あ、あれ? なんにもない……?

目を開けると目の前に獄寺君がいた

獄寺「10代目……逃げてください」

ツナ「え……!?!」

その瞬間獄寺君から大量の血が噴き出して倒れた

ツナ「大丈夫!?! 獄寺君!?!」

千種はヨーヨーを持ってすぐそばまできていた

千種「壊してから連れていく」

血がポタポタと落ちていつている

どうしよう・・・この人相当やばいんじゃない・・・

獄寺君は動けそうにないし、オレは何もできないし・・・

千種「早く済ませよう」

ヨーヨーを構える

このままじゃやられる・・・でも足がすくんで動けない

千種がヨーヨーを投げる

ツナ「うああああー！」

その時何かに引っ張られる感覚がした

気付いたら千種の針は当たっていなかった



いったい何が・・・

そう思って上を見た。そこにいたのは・・・

山本「滑り込みセーフってとこだな」

ツナ「山本!!」

---

side 山本武

結局は学校終わっちゃまったな

獄寺は途中で帰るしツナは来たと思ったらすぐどっか行っちゃった  
もんな

それにほとんどの生徒が登校してないみたいだしいったいどうした  
んだ？

そんなことを考えながら並盛商店街を歩いている

最近物騒なせいかいつもより人影が少ない

前から高校生らしい女子2人が来た

女子高生A「また並中生がいる。早くここから離れよう」

女子高生B「そうだね。ほんと物騒だわ」

また並中生がいる・・・！？

この先にも並中生がいるのか

考えていたら少し離れたところで大きな爆発音がした

もしかしたらツナたちがいるかもしれない・・・行ってみよう

爆発音がしたと思うあたりまで来た

周りの建物はほとんど崩れていて焦げた跡や針みたいなのが地面に刺さってる所がいくつもあった

こいつは何かあったな・・・

ツナ「大丈夫！？獄寺君！」

山本「！！この声は・・・ツナ！？」

少し先からツナの声がした

オレは走って声のした先へと向かった

そこにいたのは倒れている獄寺と突っ立っているツナ、知らない制服を着ている男子だった

男子の手にはヨーヨーが握られていた

よくわからないがオレの中であいつは危ないと言っている

男子が動いた

オレはとっさにツナのほうへと走りスライディングでツナと獄寺を移動させた

ツナ「山本!!」

山本「滑り込みセーフってとこだな」

さっきまでツナたちがいたところを見ると針が何本か刺さっていた

ここに来る途中で見かけた針はあいつの攻撃だったのか

とっさによけたけどツナは無事みたいだ

獄寺は・・・!! いったい何があったんだ!?

獄寺の体からは大量に血が出ていた

あの見たこともない男子も大量に血が出ていた

ツナ「山本、獄寺君が・・・」

山本「ああ、こいつは穩やかじゃねーな」

千種「邪魔だ」

奴の手が動く

おそらくあのヨーヨーから針が出てるんだろっ

ヨーヨーがこっちに向かってくるのなら針が出る前に・・・

スパンッ

切ってしまえばいい

山本の足元には真っ二つになったヨーヨーが落ちていた

千種「!!」

ツナ「切ったー!っーかいつから山本のバット常備!？」

千種「そうか・・・お前は並盛中学2・A出席番号15番、山本武・  
・・・」

山本「だったらなんだ」

ツナ「そういえば山本、ランキング3位だった・・・」

千種「お前は犬の獲物・・・もめるのめんどくさい」

そう言い残して奴は帰って行った

ツナ「はっ、獄寺君大丈夫!？」

山本「しっかりしろ! 獄寺!」

この後、獄寺は学校にいたシャマルのところへ連れて行き治療してもらった

命に別条はないらしいが出血の量が半端なかったらしい

しばらくは安静にしておかないといけないそうだ

s i d e 雪風麗

---

やめる六道

あのときの、あの事を私に見せるな

いやだ、思い出したくない。このままでいたい

過去を思い出すと自分が自分でいられなくなる

お願い、もうやめて

やめて、やめて、やめて……

side 沢田綱吉

---

獄寺君、無事でよかった

でも何だろう。なんかいやな予感がする

この後何か恐ろしいことが起こるような……いや、もう起こってる！

なんでだかよくわからないけど何か感じる

どこか別の場所で何かが起こってる！！

どうしよう……獄寺君や山本を巻き込むわけにはいかない

そうだ！リボーンに相談しよう

きつとあいつが解決してくれる



このときはまだ知らなかった。ツナの子感が的中することに

- そして、麗の抱え込んでいるものがあまりにも大きすぎることに・・・

## 標的25 千種vs獄寺決着（後書き）

・ 明日から中間テストがあるのでテンションの上がない音無です・

今回はほとんどが原作に近い話になってしまいました

戦闘シーンをうまく表現できなくてわかりづらいとが多いと思います

改善していくために誰か助言を・・・

精一杯努力していくので今後とも「謎の転校生は・・・」をよろしくお願いします（<―>）

標的26 9代目からの手紙(前書き)

今回はほぼ原作に近くなってしまいました・・・

次回こそはオリジナルをたくさん入れたいなあ

## 標的26 9代目からの手紙

side 沢田綱吉

いざ、骸退治に出発！！

・・・って、どうしてこうなるんだ

オレは今、黒曜ランドのすぐ前まで来ている

リポーンに聞いた話だと今回の事件の首謀者は六道骸っていう人らしい

骸はイタリアで集団脱獄を行った主犯で、脱獄の際部下を何人か連れて行った。そして、10日ほど前に黒曜中に転校しあつという間に不良をしめた

オレはてっきりマフィア関係かと思ったけどその逆でマフィアを追放された身だという

で、どうして俺がこんなやばい相手のところに行かなきゃいけないのかという

今から約2時間前のこと・・・

獄寺君のお見舞いに行った帰り道

ツナ「こんな大変なことになっちゃって！オレどうなっちゃおうの？  
！？」

オレはこれからどんなことが起こるのかと不安になっていた

リボーン「ツナ、初めてお前あてに9代目から手紙が来たぞ」

ツナ「っな、9代目だって〜！！」

9代目からの出が身の内容はこうだった

親愛なるボンゴレ10代目、君も歴代ボスがしてきたように次のステップを踏み出す時が来たようだ。君にボンゴレの最高責任者とし

て指令を言い渡す。12時間に以内に六道骸以下脱獄集を捕獲。そして捕えられた人質を救出せよ。

## 9代目

だった

ツナ「ちよつ、何だよこれ!？」

リボーン「追伸。成功した暁にはトマト100年分を送ろう」

ツナ「いらねーよ!！」

リボーン「ちなみに、断つた場合は裏切りとみなしぶっ殺・・・」  
わーっ!聞こえない

聞こえない!！」

途中でリボーンの話を遮った

いったい何なんだよ・・・

こんな危険なことになるなんて

あれ?そういえば雲雀さんが黒曜ランドへ行ってからけっこつ経ってるよな。なのにまだ帰ってきてないってことは・・・本当に相手はやばいやつなんじゃ!？」

そんなことを考えながらオレは家へと向かって歩いてきた。そんなとき

「お！いたいた。オレも連れてってください！」

と、声をかけられた

不思議に思っただけ振り返ってみるとそこにいたのはさっきまで会っていた獄寺君だった

獄寺「今度はメガネヤローの息の根とめますんで！」

ツナ「獄寺君！つかケガは大丈夫なの！？」

獄寺「あんなのかすり傷っすよ」

そんなことを言いながら獄寺君はフラフラだった

絶対に大丈夫なはずがない。無理しちゃいけないのに・・・

獄寺君のことを心配していると向こうのほうから山本が歩いてきた

山本「オレも行くぜツナ！今回の黒曜中のことはチビに全部聞いたぜ。」

学校対抗のマフィアごっこだった？」

山本、リボーンにだまされてる・・・

その後ビアンキも来てリボーンが勝手に話を進めていった

まあ、こういった流れで今黒曜ランドの前まで来ている

オレはここにきてても何にも出来ないのに・・・



s i d e 雲雀恭弥

---

僕が目を覚ます飛び知らぬ部屋に1人でいた

雲雀「暗くて何も見えないな。麗、いるのか？」

.....返事がない

ということはどこにいないかもう死んでいるか、このどちらかだな

体のあちこちが痛い

あのパイナップルヘアの奴なぜ僕が桜に弱いと知っていたんだ？

それより、僕があ部屋に入ったときには何もなかった。あの桜はいつあの部屋に運び込まれたんだ？でも、桜がなければたいしたことはない

次あつたときは噛み殺す

それにしても、麗がないとつまんないな・・・

ついでだから麗を助けてあげよう。まあ、生きていたらね

やっと静かになりました

雲雀恭弥。並盛中のケンカの強さランキング1位。たいした程でもなかったですね

それにしても、ランキングの名前を見たときはまさかとは思いましたがあの雪風麗が並盛にいたとは・・・

一番厄介なのはアルコバレーノと思っていたのですが雪風のほうが厄介だ

あの“能力”が発動してしまっただけでもどうしようもない昔一度“能力”には世話になったよ。予想外ではあったけど結果的に僕の思い通りになった。いや、それ以上か・・・

あの出来事が雪風にとってトラウマとなり弱点となった

その記憶を見せることは僕にとって造作もないことだ。だから今の雪風は僕のおもちゃだ

そろそろボンゴレがこちらに来るところでしょう

さあ、これから面白いことが待っている

骸「そろそろ始まりますね。あなたの出番はまだですが楽しみにしていますよ」

「・・・・・・・・」

骸は部屋の隅に立っている誰かに話しかけるが反応はない

女だと思われる人物は何もしゃべらず骸のほうへと歩いて行く

日の光が女の顔を照らす

骸「今のあなたは僕のおもちゃだ。ほんとうに楽しみですよ。・・・  
雪風麗」

麗「・・・・・・・・はい」

そこにいたのは先ほどまでもがき苦しんでいた雪風麗の姿だった

ここはどこだろう・・・

さっきまで私は何を見ていた？何も思い出せない

ただど何かの悪夢から解放されたっていうことだけはわかる

そっだ、私は六道骸に昔の記憶を見せられていたんだ

でも今はそんなことどうでもいいように思えてくる

ここは気持ちがいい

何もかも忘れられそっだ。そう、何もかも・・・

標的26 9代目からの手紙(後書き)

これから麗はどうなって行くんでしょうかね？

それは少し先になりと思います

今回も読んでいただきありがとうございます(´・`)  
ー(´・`)

## 標的27 山本vs犬

sideリボーン

今俺たちは黒曜ランドへと来ていた

そこはすでに廃墟となっていてあちこちの金属はさびていた

敷地内に入ることは簡単だ。しかし、敵のアジトとなるとそう簡単にはいかねー

山本「んー？何か動物の足跡だな。まだ新しい」

敷地内を歩いていると何かに気付いた山本がしゃがみ込んだ

リボーン「犬か？」

山本「にしちゃあでかすぎるな」

その様子に気づいたみんなが何かの足跡の周りに集まりだす

ビアンキ「爪の部分・・・血よ」

ツナ「ひいひい……」

獄寺「10代目気を付けてください。何かいる！」

獄寺の一言で皆に緊張感が張りつめられる

どこかの茂みから音がした

獄寺「野球バカ、後ろだ！！」

獄寺が叫んだ瞬間山本の後ろの茂みから黒い犬が飛び出してきた

その犬は山本に向かって飛び込んでいく

山本「くっ」

山本の目の前まで来ていて止められないと思われた。しかし、次の瞬間犬の口から大量の血が噴き出した

あの犬はすでにやられているものだった

皆が驚いている間にまた茂みの中から音がして2匹の犬が出てきた



獄寺と山本のほうへと突き進んだが大量の血を噴き出して倒れた

獄寺「こいつらもえぐられた死体だ」

ツナ「ひいひいっ……いったい何が起きてるの!?!?」

ピアンキ「狙われているわ!早くこっちへ」

ピアンキの先導で走り出したツナたち

リボーン「ん?」

何か地面に違和感がある

「かかったぴょーん」

どこからか陽気な声がした

すると、近くの建物の陰から人影が現れた

その人影は山本へと飛びかかるがよけられた

よけた際に山本はバランスを崩し地面へと倒れこむ。その地面からはミシミシと音がしていた

山本が不思議に思ったその瞬間地面が砕け下へと落ちて行った

その後を追うように人影も穴へと飛び込んだ

ツナ「何・・・今の？」

獄寺「人影のように見えたが・・・」

ビアンキ「山本が落ちたわ」

ツナと獄寺は状況が理解できず混乱していたがビアンキは冷静に状況を把握していた

リポーン「ここは動植物園だった場所だな。土砂の下に埋まっちゃまってんだ」

ツナ「じゃあ、ここ屋根の上々！！山本大丈夫！？」

山本「いっつゝまいったな。ハハハ・・・」

下はかなり深いようだ

まあ、笑っている余裕があるならたいした怪我はしていないだろう

ツナ「山本っ！！右に何かいる！」

山本「！！！」

ツナの奴、最近鋭くなってきたな

山本を追って下に言ったやつ、あの動きはかなり素早い

どうする、山本武

side 山本武

---

ツナ「山本気を付けて！陰に何かいる！」

うーん。どーすっかな

確か何か飛んできてよけたらこの穴に落ちたんだけどあれはいったい何なんだっただらう？

「歓迎すんよ、山本武」

山本「！！」

陰の中から声がした

その方向を見てみると人がいた

それは、連続暴行事件の一味の城島犬だった。しかし山本たちは犬

の正体を知らない

犬「柿ピー寝たままでさー、命令ねーし、やることねーし超暇だったの。

そこへわざわざオレの獲物がいらっしやっただもんな。超ハッピー」

獄寺「黒曜の制服!！」

犬「上の人たちは首を洗って待っててねー。順番に殺ったげるから」

まるでゲームを始める子供のように軽く言う

犬「それじゃ・・・よい、ドン」

この合図と同時にかけだす犬

そのまあ山本へと向かっていくが山本はギリギリのところまで右へとかわす

かわされた犬はそのまま勢いを利用して壁を蹴り回転しながら高く飛んだ

ツナ「な、何あれ!？」

獄寺「人間技じゃねー!」

その様子を見ていたツナと獄寺が叫ぶ

犬は壁から壁へと移りまた山本へと突っ込んでいく

山本は持っていたバットを出しガードするが噛み砕かれた

犬「ヒヤッホーウ!次は喉をえぐるぴょん」

そう言いながら噛み砕いたバットの欠片を口から出す

山本「フー。なるほどな。マフィアごっこってのは加減せずに

相手をぶっ倒していいんだな。そういうルールな」

ツナ「怖がるどころか山本の顔つきが変わった・・・」

リボーン「あいつ、あー見えて負けん気つえーからな。

バットを折られて心中穏やかじゃねーぞ」

犬「お前には暗くてよく見えねーかもしんないけど、オレにはお前の位置が

よくわかるびょん。だってオレにはお前にべっとりつけた犬の血のにおいが

プンプン臭ってくるんだよーん

言い終わると同時に山本の前に鋭い爪が振り落とされる

刀を折られて武器のない山本はよけてばかりだ

犬「よけてばかりでつまないから上の人から殺っちゃおーかなー」

といった瞬間犬の後頭部に小さな石が当たった

犬「んあ？」

山本「お前の相手は俺だろ？こいよ。こいつぶち当ててゲームセツトだ」

そういつた山本の手には小石が1つ握られていた

犬「ほへー挑戦状だ。んじゃオレも本気だそうかな」

かけだした犬は今までとは比べ物にならないくらい速かった

山本は小石を投げたがはずれた

犬「いたらき!!」

山本の左腕にかみつく犬

腕がメキメキとなりながら血を噴き出す

山本の負けかと思われたそのとき

山本「お互い様だぜ!!」

そう言つて刀の柄で犬の頭を強く殴る

犬は叫び気絶した

獄寺「あいつはなっから腕一本くれてやるつもりで……!!」

山本「終わったー。ツナ、引き上げてくんねーか？」



ツナ「え、分かった」

犬を倒した山本はツナたちによって穴から引き上げられた

幸い山本の腕はたいした怪我ではなかった（メキメキっけていてたけど・・・）

ツナ「山本、野球の大会近いのに・・・本当にごめん」

山本「よしてくれよ。たいした怪我じゃなかったし」

それに、昔は野球が一番だったけど今はダチためならなんだってやるさ

リボン「そんじゃ、さっさと先に進むぞ」

s i d eフウ太

---

犬との戦いをフウ太は近くの茂みから見ていた

ごめんねツナ兄・・・

ごめんねみんな・・・

もう、みんなのところには戻れない

骸さんについて行くことにしたよ・・・おまじなうら

## 標的27 山本vs犬（後書き）

一つ問題が解決したと思ったらまた問題が発生・・・

文化祭が近く実行委員をすることになった音無はそんな状況でツナたちみたいに大忙しです

さて、流れのほとんどが原作通りになっていなすが「つまんない」と思っている読者の皆さま、これからが音無の“オリジナル”がたくさん入ってきます

おそらく、M・Mやバーズの戦闘シーンは省かれると思いますのでご了承ください

## 標的28 疑問と不安（前書き）

最近テスト勉強をしろと親につるさく言われ仕方なくやっている音  
無です

（泣き言いってたらリボンに何か言われそーだなー・・・）

読者の方がだんだん増えてきてとても嬉しく思います！！

未熟者の作品を読んでくださる皆様に感謝の気持ちでいっぱいです

（TーT）

## 標的28 疑問と不安

sideリボーン

こいつはヤベーな

俺たちは今危機的状况にある

目の前には写真で確認した六道骸が立っていた

その横には体から血を流して倒れている山本の姿があった

オレたちはあの後、しばらく黒曜ランドを歩いていた。そこにいきなり六道骸が現れた

ディーノから情報と写真をもらい相手の顔と名前は知っていたがここで現れるとは思ってもいなかった

獄寺がトライデント・モスキートの副作用で動けないため山本が相手をしていたが全く歯が立たなかった

ツナはびびって動けなくなっている。今ここであれを使うしかねーか

リボーン「暴れてこい。ラスト一発だ」

最後の死ぬ気弾をツナに撃った

ツナ「復活<sup>リ・ボーン</sup>！六道骸、死ぬ気で倒す！！」

死ぬ気になったツナは六道骸に向かっていった

---

side 沢田綱吉

ツナ「ハア、ハア……」

六道骸……強い

死ぬ気になったオレは六道骸へと向かっていった

鋼球による攻撃を全て止め、六道骸にダメージを与えることができた

しかし、六道骸は肉弾戦が強かった

攻撃に回れず防御ばかりが続く

だけどオレは何か違和感を感じた

六道骸からは悪意を感じられなかった。むしろ罪悪感を感じる

もしかしたらあの人は六道骸ではないのではないかとさえ思った

ツナ「あんたはそんなに悪い人じゃない」

そんなことを言っていた

六道骸「黙れ小童！！お前にオレの何が分かる！！」

そう言っつて拳を振りかざすがツナの腹へのパンチにより膝をつく

六道骸は口から血を吐きだした。もう立てる体力はなかった

六道骸「オレが・・・ま・けた・・・」

負けたのが信じられないという顔をしている

ツナ「攻撃するとき必ず目を閉じるのも鋼球を使わなくてはとどめをさせないのも

あなたの心に罪悪感・・・迷いがあるからだ」

ツナの死ぬ気モードが解けていく

ツナ「最初に見たときからおかしいとは思っていたんだ。

とてもあったかくて怖い感じがしなかった」

六道骸（こいつ、一見にして俺を見抜いたというのか・・・）

ツナ「あなたは本当の六道骸ではないのでしょうか？」

六道骸「!!」

ツナ「何か理由があってこんなことをしてるんでしょう？」

あなたが自分の意思でやったとは思えない」



六道骸「……。オレは……六道骸ではない。あいつにオレは利用されてきた。」

何度も逃げようと思ったがオレは世間では罪人として扱われているから

逃げる場所がなかった。気を付けるボンゴレ。あいつの目的は……。」

ツナ・リボン「!!」

目の前の人の体から大量の血が噴き出した

何が起こったのか分からない。一瞬だった

何かが横切ったような気がした。その瞬間に血が噴き出してきた

リボン「口封じのために誰かが斬ったな。そこに隠れてないで出てこい」

近くの木に向かって話しかける

その木の後ろには人影があった

獄寺「10代目下がっててください」

ツナ「獄寺君！もう大丈夫なの！？」

ピアンキ（副作用がひいたのね）

「ふふふ」

木の後ろから笑い声がしてきた

獄寺「てめー隠れてないで出てきやがれ」

ダイナマイトを投げつける

爆発と同時に人影が表に出てきた

そこにいたのは・・・

獄寺「つな！おまえは！！」

ピアンキ「なぜあなたが！？」

リボーン「！！！」

ツナ「え！？なんで・・・？雪風さん、どっしてここに居るの？」

並盛中2 - A 雪風麗だった

リボーン「麗！いったい何があった」

麗「・・・」

こんなに驚いているリボーン初めて見た

いったい雪風さんに何があったんだろう

ピアンキ「麗、あんたがこの人を殺したの？」

麗「殺してはいない」

ツナ「よかった雪風さんがやたんじゃなかったんだ」

麗「ただ、しゃべれない程度に傷を負わせただけ」

ツナ「！！何で雪風さんがこんなことを・・・」

リボン「・・・マインドコントロール」

ぼそつと呟いた

オレ達は何が何だか分からない状態でした

しばらく静寂が続く。最初に口を開いたのは麗だった

麗「本物の六道骸に会いたければ向こうに見える黒曜センターに来い。

そこで六道骸はお前たちの知っているある人物と待っている」

獄寺「何でそんなことをお前が言うんだ？」

麗「これから、楽しいゲームが始まる」

そういつて雪風さんは黒曜センターの方へと去っていった

まるで風のように速かった

状況を把握できていない俺たちは何をしていたのか分からなかった

「うう・・・」

偽物の六道骸が弱々しくうなる

ビアンキ「意識がまだあるわ」

ツナ「大丈夫ですか！？えっと・・・そうだあなたの名前、六道骸ではない

本当の名前があるのでしょうか？」

偽骸「・・・オレの名は・・・ランチア。さっきいた雪風と六道骸には気を付ける・・・」

あいつらは昔から・・・とんでもないやつらだっ・・・た・・・

「

ランチアはそこで気を失った

ツナ「そんな・・・ランチアさん、しっかり!!」

獄寺「不要になったとたんこれかよ。しかしなんで雪風が・・・

それに、最後のランチアさんが行っていた言葉が気になる。

まるで雪風と六道骸が昔からの知り合いみたいじゃねーか」

獄寺の言葉でみんなの表情が暗くなる

ツナ「でも・・・雪風さんはそんなことをするような人じゃない。  
確かにちょっと怖いところもあるけど本当は優しい人だよ、  
きつと。」

過去に何があったかは知らないけどオレは雪風さんを信じて  
る！」

リボン「ツナ・・・（言うようになったじゃねーか）」

獄寺「10代目・・・」

ビアンキ「うじうじしてても仕方ないでしょ。山本も治療したしさ  
っさど行くわよ」

そういったビアンキの隣には少しフラフラしているが元気な山本が  
いた

山本「事情はビアンキから聞いたぜ。ツナの言うとおり俺達も信じ  
よじぜー」

獄寺「野球バカに言われるのはしゃくだが・・・信じてやるよ」

リボーン「そんじゃ、いくぞ」

六道骸のやり方はひどすぎる。あいつだけは絶対に何とかしないと  
！！

こうして俺たちは少しの不安を抱えながらも六道骸のアジトへと向  
かうことになった

骸「おかえり、麗。クフフ、無事完了したみたいですね」

麗「・・・」

私は何をしているんだろう

思考がうまく回らない。体が言うことを聞かない

マインドコントロールとはまた違う感覚がする

私はいつたい何者・・・？

だんだん、意識が遠のいてくる

骸「麗、あなたにはまだまだ働いてもらわないといけませんよ」

麗「・・・ニヤッ」

誰も見ていない中、静かに不気味に笑った



## 標的28 疑問と不安（後書き）

さてさて、麗の秘密が徐々に暴かれていきますよ

骸と麗との関係はいかに・・・！！

いま、いくつかのパターンが頭をよぎってどのパターンで行こうか迷っています・・・

## 標的29 マインドコントロール

side 獄寺隼人

獄寺「いよいよっスね」

オレ達は黒曜センターの入口まで来ていた

10代目とランチアさんの戦いが終わり雪風があらわれた

雪風は六道骸にコントロールされているのだからとりボーンさんは言っていたけど、一般人にしてはあの殺気はただものじゃなかった

雪風麗・・・転校してきたときから何か違和感があったんだ

名前は聞いたことがないからマフィア関係ではないのだろう

ツナ「ここに六道骸がいるのか・・・緊張してきた」

山本「大丈夫だって。麗の奴もきつと待ってるぜ」

ピアンキ「そういえば、麗の言っていた私たちの知っている人って誰かしら？」

そういえばそうだぜ・・・

それに最後の残したあの言葉

『これから楽しいゲームが始まる』

いったいどういう意味なんだ？これから何が起きるっつーんだよ

リボン「先に進むぞ」

リボンさんの声を合図に皆歩きだした

中はかなりボロボロだった

あちこちにがれきがあったし窓ガラスはほとんど割れている

オレ達は少し歩いた。そこで姉貴が何かに気付いた

ピアンキ「おかしい・・・階段がないわ」

リボン「壊されてるみて だな。だが、必ず一つはあるはずだ」

ツナ「どつどつどつと？」

リボン「こちらの移動ルートを絞った方が守りやすいだろ？」

逆にいえば自分の退路を断ったんだ。勝つ気満々ってことだな」

そういうことか・・・なめられたもんだな

ん？足に何かが当たった

下を見てみると壊れたケータイだった。しかも雲雀恭弥っつーやつのだ

ツナ「獄寺君、そのケータイって雲雀さんの？」

獄寺「みたいつスね」

山本「なあ、知ってたか？雲雀さんの着うた、うちの校歌なんだぜ」

獄寺「なあ！？ダッセー！」

まじかよ。どんだけ雲雀の奴並盛に愛着持ってたんだよ

ツナ「あー！あっちに非常階段があったよ！」

獄寺「さすがは10代目！」

リボーン「いくぞ」

階段へと向かって歩きだしたときだった

シュルルルル

聞き覚えのある音がした

あの音は確か・・・柿本千種っつーやつのもーの音じゃねーか

獄寺「どこに隠れてやがる！出てきやがれ！！」

ツナ「えー！！もう敵が来たの!?!」

千種「めんどくさい・・・早く済ませよう」

曲り角から出てきた千種は独り言のように言った

ツナ「で・・・出た！黒曜生・・・」

獄寺「10代目たちは先に行ってください！ここはオレが食いとめます」

ピアンキ「隼人聞いて。あなたは前にやられたときシャマルのトライデント・モスキート

のおかげで命を取り留めたの。そのためまた激痛をともなう発作が起きるわ。

それでもやる気？」

獄寺「あたりめーだ。そのためにオレはいる」

何を言われようがオレの決意は変わらねー

だが、よりによってあいつに助けられるとは……

しかし、副作用とは厄介だ。いつ起きるかわかんねー

せめてこの戦いが終わるまで持てばいいんだが

ツナ「獄寺君……」

ピアンキ「行きましよう、ツナ」

よし、10代目たちは無事行ったな

それにしてもおとなしく行かせてくれたじゃねーか

何か企んでいるのか？

それとも、この先行かせても俺たちには勝ち目がないとでも思っているのか

まあ、どちらにしてもオレは勝つー！

獄寺君を置いて行っちゃったけど大丈夫かな

確かに獄寺君は強いけどやっぱり心配だよ

ピアンキ「ツナ、隼人は大丈夫よ」

山本「そうだけ。ぜってー大丈夫だって」

ツナ「ピアンキ・・・山本・・・」

そうだよね。オレたちが信じてあげないといけないんだよね

獄寺君はきつと大丈夫。オレは前に進まなきゃ

そう思っていたとき、近くに3階へと続く階段を見つけた

オレたちはそこをのぼって行った。また敵が現れるかもしれないと思っただけど今回はいなかった

その変わりそこにいたのはフウ太と本物の六道骸だった

ピアンキ「フウ太、そこは危ないから下がってなさい」

そう言いながらフウ太へと近づいていく



おとなしくビアンキに従うと思ったそのときだった

ビアンキ「……!?ふう……た……」

ツナ「ビアンキ!?!」

フウ太の隠し持っていた剣がビアンキのおなかに刺さっていた

山本「いったいどうしちまったんだよ!?!」

皆が驚きをかくせないでいる

その中でフウ太の近くにいた六道骸だけが笑っていた

ビアンキはおなかに剣をさしたまま倒れる

フウ太はビアンキから剣を抜きオレめがけて走ってきた。そのまま  
剣を振りかざす

とっさに体をそらす。剣はオレの目の前の空を切った

ツナ「フウ太、どうしたんだよ。そんな物騒なもんしまえよ!

フウ太「ううう・・・」

フウ太・・・まさか

リボーン「マインドコントロールされているみてーだな」

やっぱり・・・

フウ太のあの目、ランチアさんの目と似ていた

きっと自分のしたことに罪悪感を感じてるんだろうな

でも心配することはないよ。何があってもフウ太はフウ太だ

再びフウ太が剣をツナに向かって振りかざそうとする

ツナ「おまえは悪くないぞ。全然おまえは悪くないんだ」

フウ太「ううう・・・」

フウ太の動きが止まる

ツナ「みんなフウ太の見方だぞ。安心して帰ってこいよ」

フウ太「ううっ……」

フウ太の顔が苦痛で歪む

骸（マインドコントロールを解く『一番望むこと』を言い当てたか……）

フウ太「……ツナ兄」

ドサッ

正気に戻ってフウ太は最後にツナの名前を呼び気を失った

倒れたフウ太から口や鼻、耳からも血が出てくる

ツナ「おいっ！フウ太!？」

どうしよう……

血が止まらない。速く手当てしなきゃ

骸「君が余計なことをするから彼、クラッシュしちゃったみたいですね」

ツナ「そんな！」

骸「彼は本当に手のかかる子でしたよ。ボンゴレ10代目と顔見知りと噂のフウ太君に

来てもらったのですが“オルメタ沈黙の掟”を貫き通しだんまりでしてねえ。

さらには、心を閉ざしてランキング能力まで失ってしまった」

ツナ「なんだって!？」

リボーン「それで仕方なく以前に作られた並盛のケンカランキングを使い

ツナとファミリアをあぶりだそうとしたんだな」

骸「さすがはアルコバレーノ。もくろみ通り今ここにボンゴレはいる」

ツナ「いつたい人を何だと思っているんだよ!!」

その問いに骸は当たり前のようにこう言った

骸「おもちゃ・・・ですかね」

なんてやつだ

本当に自分のことしか考えていない

人をおもちゃ扱いするなんて絶対に許さない

どこから闘争心がわいてきているのかは分からないけど、『オレは六道骸に勝たなくちゃいけない』そう感じた

山本「ツナ、ここはオレに任してくんねーか？」

ツナ「山本・・・？」

いきなり山本が言ってきた

ダメだと言おうと思ったけど山本の目を見たらそんなことは言えなかった

山本の目は本気だった

本気で怒っていた

ツナ「無茶はしないで……」

こういうしかなかった

山本「さんきゅー」

山本がバットを振り剣へと変える

骸「ほう……そのバットは面白いですね。いいでしょう。相手してあげますよ。」

しかし、私ではないですが」

山本「ここにはあんた以外黒曜生はいない！」

たしかにそうだ

ここには六道骸以外の黒曜生の姿は見えない

なんだか嫌な予感がしてきた

骸「確かに黒曜生はいませんね。黒曜生は……」

山本「どういうことだ？」

骸「クフフ。出てきなさい・・・麗」

山本「!!」

ツナ「!!」

リボン「!!」

骸の指示と同時に骸の後ろにあったドアから麗が出てきた

骸「麗、この子たちの相手をしてあげなさい」

笑いながら麗に指示を出す

麗「分かりました。骸様」

無表情でそういった麗は俺たちに向かって歩きだした

麗の目は感情が全くないような冷たい目をしていた



## 標的29 マインドコントロール（後書き）

やっとここまで来ました

次からは戦闘がメインになってくると思います

私の文章力じゃ分かりにくいところが多々あると思いますがご了承ください

（どなたか私に知恵と技術を与えてください・・・）

標的30 麗の“能力”

side 雲雀恭弥

どれくらいここにいただろうか

気がついてからしばらくたつが近くに人が来る気配はない

麗は何をしているだろうか

六道骸に何かされてはいないだろうか

フツ、僕らしくないな。他人のことを気にするなんて

麗のことだ。そう簡単にやられはしないだろう。まずは自分自身のことからか・・・

ここは真っ暗だ。出口が見えない。ヒヨコが一匹僕の隣にいることはわかる

ずいぶんと人になれているようだ

そういえばずいぶん離れた場所で物音がしたな。誰か来たのか？

ドカーン

そう考えているうちに僕のいる階から爆発音がした

戦っているのか。まあ、僕には関係ないけどね

弱いやつには興味はない。今は六道骸、あいつが僕の餌だ

「うがあああ！」

誰かのうめき声がする

「ヒヤハハ。ザマーみろ」

今の声は黒曜中の奴らか

緑たなびく並盛の〜大なく小なく並がいい〜

あのヒヨコが歌っているのか

気がつけばヒヨコは壁の小さな隙間から外に出ようとしていた

「どじうってんのー？そんなの当たんねーよ」

ドッガン                      ガラガラ

次の瞬間爆発音と同時に部屋の壁が崩れ落ちた

自分でも出れたけど・・・まあいいか

砂埃が収まり視界が良くなってきた

最初に目にしたのは胸元が血だらけの並中生だった

確かあいつは2年の獄寺隼人。よく小動物と一緒にいる奴らの1人が

群れるから弱いんだよ

犬「ヒヤハハハ！こいつが助っ人？」

黒曜生か・・・本当に群れる奴らは嫌いだ

むかついたから気晴らしにこいつらを噛み殺そう

雲雀「その2匹は僕がもらうよ」

獄寺「好きにしゃがれ」

そこからは一瞬だった

犬の速い攻撃を雲雀はいとも簡単にかわしトンファーを顔に一発かまして吹き飛ばした

千種のヨーヨーは仕込みの武器により真つ二つに切られた

驚きと動揺を隠せない千種に容赦ない雲雀の一発が決まった

雲雀「さて、麗を迎えに行こうかな」

何事もなかったように言う

獄寺を置いて行こうとするが

雲雀「でも、こいつにはかりができた。そのままじゃいやだから仕方ないか」

獄寺を起こし支えながら歩き出す

獄寺は驚いてはいたが歩ける体力がないため抵抗はしなかった

おいおい、どーすればいいんだよ？

雪風相手に本気でやれるわけねーだろ

本物の六道骸のところにとどりついた俺たちはフウ太を取り戻すことができた

後は六道骸を倒すだけかと思っただがあいつは更なる人質を出してきた

そこにいたのは同じクラスの雪風麗だった

何か精神をコントロールされているようなことをツナたちが言っていたけど、この状況でどうすればいいんだよ！？

骸「クフフ、あなたたちに麗を倒すことができますかね？」

面白そうに言う

ツナ「雪風さん！！目を覚まして！！」

骸「何を言っても無理ですよ。麗にはさっきの子よりも強力にしてありますから」

山本「クソツ。戦えない奴相手に刀を使うわけにもいかねーし……」

雪風をどう止めようか考えているときだった

リボーン「ちげーぞ」

山本「え？」

ツナ「リボーン、何が違うって言うのさ？」

ツナがもつともな疑問を言う

リボーン「あいつは戦えねーやつじゃねー。いや、戦えねーというより自ら戦うことから

離れていたんだ。あいつは強い。少なくとも雲雀と同じかそれ以上の実力だ」

予想もしていなかったことだった

中途半端な時期に来た転校生。おとなしくて戦いなんて関係ないよ  
うなあいつがああ雲雀恭弥に匹敵するほど戦いが強い!?

ツナ「そんな・・・」

山本「あの雪風が・・・」

リボン「!!よそ見してんじゃねー。攻撃が来るぞ!」

気がついた時には既に遅く、そこら辺に落ちていた木片で体をはじ  
かれた

山本「ゲホツゲホツ・・・」

一撃が重い・・・

あんな細い体からこんな力どっから出てくるんだ?

ツナ「山本!!」



雪風がまた木片を持って走ってくる

こんなに強いんじゃない。少し本気を出そう

剣を構え雪風が来るのを待つ

雪風が木片を振りおろそうとした瞬間

シュッ

ゴトッ

雪風の持っていた木片の先が斬り落とされていた

ほんの0.05秒で剣を振ったのだ

リボーン以外は剣の太刀筋が見えなかった

骸「ほほう。ボンゴレにも少しはできる人がいるのですね。驚きま  
したよ」

ツナ「山本すごすぎ。これなら雪風さんを取り戻せる」

雪風は反応できていなかった

このままなら怪我させることなく取り戻せる！！

と思っていた

骸「クフフ、ですがまだまだですね。麗は実力のほんの少ししか出していない。

麗、あなたの“能力”でボンゴレの守護者を倒しなさい。沢田綱吉だけは

殺してはなりませんよ」

麗「・・・はい、骸様」

雪風の“能力”？　いつたい何なんだ？

それにツナだけは殺さずにいたってことはあいつの狙いはツナか

リボーン「くつ。麗の“能力”は面倒だぞ」

ツナ「リボーン、雪風さんの“能力”について何か知ってるの!？」

リボーン「まあな。あいつの能力ってのは・・・」

骸の命令を聞いた雪風は切られた木片を捨て、右手を開いて床へと向けた

テッラ・ディ・ギアッチョ  
麗「氷の大地」

リボーン「氷を自在に使うことだぞ！」

次の瞬間リボーンは高く飛んでいた

そして床が雪風を中心に凍っていった

気付いた時には遅かった。床一面に氷が張っていた。しかもオレやツナ、ビアンキまでもがその氷に足を固定されていた

しくじった。動けねー

動けないオレに雪風の重い蹴りが当たる

肋骨が折れた感覚がした

足が固定されているためうまくよけることができない

このままじゃ殺られる

リボーン「ツナ、さっさと出る」

ツナ「そんなこと言われたって……何か砕くものとかがないと……」

そうか、こうすればいいのか

オレはツナの発言にピンときた

剣をバットに戻しそのバットで足元の氷を砕いて行った

麗「ヒオッジャ・ネーヴェ雪の雨」

いきなりパラパラと雪が降り始めた

雪が落ちたところには小さな氷の塊ができたいた

ツナ「山本！！その雪に触れちゃだめだ！」

つな、しまった！

すまねーツナ。オレもうダメみたいだ・・・

side 沢田綱吉

---

オレの警告は時すでに遅く山本は雪が触れた所から凍っていった

オレが転がってきた山本のバットで氷から抜け出した時にはもう山本は氷づけにされていた

麗「次はどいつだ？」

何の感情もない冷たい声

すでに雪風さんには以前の面影すら残ってはいなかった

オレはあることを心に決めた

ツナ「オレが相手だ！」

雪風さんは悪くない。悪いのはすべて六道骸だ

雪風さんもピアンキも、山本も獄寺君ももう、これ以上は傷つけさせない

六道骸だけには負けたくない。こんなひどいやつには負けたくない

骸に勝ちたい！！

標的30 麗の“能力”（後書き）

さてさて、今回で麗の“能力”について暴かれることになりました  
がこの後どうなっていくのでしょうか

麗にはまだ秘密があります

今後の展開にどうぞご期待！！

標的31 新アイテムと“麗”（前書き）

おかげさまで20000アクセス突破いたしました（T-T）

自分がビックリ（。ロ。）

皆様、こんな小説を読んでくださりありがとうございます



標的31 新アイテムと“麗”

side 沢田綱吉

こんなやつに負けたくない。仲間を傷つけさせはしない

そう心に決めたときだった

リボーンのペットの形状記憶カメレオン『レオン』が突然光りだし  
部屋中に細い糸を張り巡らせた

ツナ「うわああ！」

無数の糸が部屋に張り前に進めない

骸「ボンゴレ、何をした!？」

ツナ「オレは何も……」

いったい何が起こったんだ？

突然レオンが光りだしたと思ったらこんな糸をたくさん出して……

リボーン「ついに羽化したな」

ツナ「羽化!？」

リボーン「あの時と一緒にだ。ディーノが“跳ね馬”になった時とな」

骸「そうか、アルコバレーノの仕業だな」

リボーン「ちげーぞ。こいつは形状記憶カメレオンのレオン。

オレの生徒が成長すると羽化するオレの相棒だぞ」

骸「クフフ、それは面白い。何を見せられるかと思えばペットの羽化ですか。

まったく君たちはユニークですね」

ツナ「笑われてんじゃない!?!何だよこれ!?!」

まったく、いったいこれとディーノさんと何の関係があるんだよ

早く雪風さんのところに行かないといけないのに

あ!でも、行ってからどうするか考えてなかった」

オレには武器もないし雪風さんは強いしどつしよ〜

リボーン「ダメツナ、見てみる」

リボーンに言われてレオンを見てみると膨らんでいた

口が動いていて何かを口に含んでいるみたいだ

リボーン「新<sup>ニュー</sup>アイテムを吐きだすぞ。オレの生徒であるお前専用のな」

ツナ「えっ……オレ専用のアイテム？」

わけがわからずリボーンに聞き返す

リボーン「ディーノん時は“跳ね馬のムチ”と“エンツィオ”を吐きだしたんだ」

ってことはエンツィオってレオンの子だったの〜!!

でも、確かにエンツィオみたいなのが出てきたらなんとかしてくれるかも

骸「いつまでも君たちの遊びに付き合っていられませんか」

麗「邪魔」

さっきまで黙っていた麗はそういつと氷で剣を作り周りの糸を斬っていた

そして自由に動けるようになるとレオンを見上げた

麗「こいつも邪魔」

そう言うと同時に床を蹴り、レオンのいる高さまで飛んだ

手に持っている氷の剣をレオンに向けて振り下ろし真っ二つに斬った

ツナ「ね、レオン」

リポーン「心配いらねーぞ。それより上に何か弾かれたぞ」

ツナ「あー!」

上をみると何かが宙に浮いていた

リポーン「無事みてーだな。あれが新アイテムだ」

浮いていた何かがオレに向かって落ちてきた

上を向いていたオレの顔に直撃したけど痛みはなかった

ツナ「え……？あれ……？こ、これって……

毛糸の手袋……！！？」

落ちてきた何かを手に取りしてみると、それはふわふわの毛糸でできた手袋だった

確かに雪風さんの出した氷の中でこれを付けてれば凍えることはないけど……ってそんな場合じゃないし！

この手袋をどうやって使えっていうんだよ

リポーン「とりあえずつけとけ」

寒かったから一応つけてみた。まあ、結構あったかいかな……

ん？なんだろう？手袋の奥に何か固いものがつまってるような・・・

不思議に思い手袋の中を見てみた

そこには1つの弾があった

ツナ「た、弾・・・？」

リボン「ツナ、そいつをよこせ」

骸「特殊弾ですか。麗、阻止しなさい」

骸の命令を聞くと同時に氷の剣をオレに向け走ってきた

雪風さんは氷の剣を横に振るがオレはとっさに体を後ろにそらしよけた

が、バランスを崩しこけた。その拍子に持っていた特殊弾が落ちてしまった

リボン「この、ダメツナ」

それを見た雪風さんとリボンは特殊弾を取りに駆け出した

一足先にリボーンが特殊弾のもとに着くと自分の拳銃に特殊弾を詰めた

銃口をオレに向け、発砲しようとする。しかしその瞬間雪風さんが横からリボーンに向かって氷の剣を振り下ろした

床の氷が碎ける音と同時に発砲音も聞こえた

オレには何も変化がない

骸「何の効果も表れないところをみると外しましたね。

これであなた方の望みはなくなりましたよ」

リボーン「・・・」

オレはここでやられるのか？もう何もできないのか？

雪風さんや仲間を助けることができずにこのまま終わるのか・・・

『んまあこの服！ツナったら散らかしたままでかけて  
自分のことは自分でしなさいっていつも言ってるのに！』

え・・・か、母さん？

・・・どうして母さんの声か？夢なのか？

リボーン「特殊弾の効果見てーだな。お前が聞こえるのはリアルタイムで届く

みんなからの小言だ」

リボーン!!

な、何でこんな時に小言聞かされなきゃならないんだよ

『落ちて着け京子』

『たつて、シャマル先生がツナ君たちがのりこんだつて・・・』

『心配するな。あいつはオレが手を合わせたなかで最も強い男だ。負けて帰ってきたらオレが許さん』

『そうだよね・・・大丈夫だよね。』

ツナ君、元気で帰ってきてね』

京子ちゃん、お兄さん・・・

『オレと同じ過ちを繰り返すな。仲間を守れ。お前がその手でファミリーを守るんだ』



ランチアさん・・・

リボン「オレの小言は言うまでもねーな」

そうだ。オレはここで弱気になっている暇はない

オレは仲間を守らなきゃいけないんだ

骸「まだやる気があるのですか？」

雪風さんがこっちを向いた

どうしてそう思ったのかは分からない。でも、雪風さんが『助けて』  
っていつているように見えた

氷の剣を構え走ってくる。その動きには迷いがなく一直線にオレの  
ところへ向かって来る

雪風さんは操られているだけだ。逃げてはいけない

剣の先が目の前まで迫ってきた

ガッツ

麗「!?!」

ツナはあの手袋で麗の剣を止めていた。すると突然手袋が光りだした

麗が後ろへと飛ぶ

麗が再びツナを見たときには毛糸の手袋はグローブへと変わっていた

ツナ「雪風さんは必ず助ける。仲間を守れないと死んでも死にきれねえ」

ツナの額からオレンジの炎が出た

骸（奴の額から出ているのはオーラ？）

『殺せ、殺せ、殺せ……』

うるさい！

『血がみたい。大量の血』

だれがお前なんかの言うことを聞くものか

『自分に正直になれく麗よ。私はお前、お前は私。己の欲求を我慢するな』

ちがう。私はお前とは違う！

もう、誰の血も見たくない。誰も傷つけない

『お前には仲間はいない。ずっと1人だたお前に私は一緒にいてあげたではないか。家族はお前を捨てたんだ。仲間だと思ってたやつ

はお前を裏切ったんだよ。』

違う、裏切ったんじゃない

あれは仕方のないことだった。ああするしかなかったんだ

『お前はいつも甘いな。しかし、いつも不安なのでしょう。今は一緒にいてくれている雲雀や沢田、リボン達がいつ自分を捨てるのかと……』

違う、違う!!

『私はお前を決して裏切らない。ずっとそばにいてあげる』

……

『さあ、私にお前の体を預けるんだ』

……いや……だ

『フッフ。もう、お前の精神はボロボロね。このまま楽になりたい想い、仲間を信じたい想いと二つの矛盾した思いがお前の精神をむ

しばらくでいる。このまま楽になりなさい。そうすればお前はもう傷  
ずかない』

もう傷つかない・・・？

『そっすよ』

・・・このまま楽になりたい

『いい子ね・・・』

・・・

『フフッ。さあ、これから楽しいショータイムの始まりよ』

ツナ「獄寺君、雲雀さん!？」

獄寺「10代目!ご無事でよかつた」

雲雀「借りは返したよ」

そう言つて獄寺を放り投げた

麗「フフツ、フッフ。アハハハハ」

ツナ・獄寺・雲雀・リボーン「!？」

そこにはさっきまでいた麗はいなかつた

操られているのではなく自分の意思で動いている麗の姿をした人がいた

麗「やっと役者がそろつたわ。仲間思いのく麗>は眠ってくれたこ



標的31 新アイテムと“麗”（後書き）

なんか、ツナ中心ばっかでスミマセン

自分で書いてて『山本ほったらかし!?!』とか思っちゃってたりしてますがいずれからんでくると思います

やっと雲雀さんも出てきてこれからが本番! って感じですよ



標的32 “麗”の逆襲

side 獄寺隼人

な、なんだ!?

オレは見ていることが信じられなかった

この部屋の床が全部氷で覆われていた。しかも部屋には凍っている  
山本の姿があった

おいおい、山本の奴死んじやいねーだろーな

一番信じられないのは雪風麗だ

おとなしかった雪風じゃねー。この状況を楽しんでやがる

寒気がした。寒かったからじゃない。雪風の目が“殺し屋”の目を  
していたからだ

やばい

直感で分かった

麗「あ、待って。シヨ―を始める前に邪魔な奴をかたづけなくちゃ」

そう言った雪風はある男の方を向いた

麗「あなたはもういらないわ。さようなら」

骸「クフフ」

六道骸のほうへ

骸「クフフ、いったいいつマインドコントロールが解けていたのでしょうね」

冷静を装っていたが内心はかなり驚いていた

麗には完ぺきにマインドコントロールをしていたはずだ。自分の意思で動くなどあり得ない

思惑通り“麗”を呼び起こすことはできた。“麗”にもマインドコントロールが効いてるはず……

麗「最初からよ。あなたのような人に私がコントロールできるとでも？」

ツナ「これはいったいどういうことだ？」

それが分かっていたら苦勞はしないのですがね……

ここまでやるとは予想外ですよ。もう、あの頃の麗とは違うということですか

今の麗には幻術は効かないでしょう

しかし、幻術が効かなくとも私に戦闘で勝てるわけがない

麗「さつさと済ませましょ。これから楽しいショーが待っている  
のですから」

---

s i d e リ ボ ー ン

ついに落ちまったか

ツナたちなら“麗”を抑えることができるかも知んねーと思っ  
ていたが甘かったか

オレも詳しくはしらねーが9代目の話だと相当厄介だ

麗、これはお前自身と“麗”との戦いになる。負けんじゃねーぞ

骸「クフフ、あなたは殺したくはなかったのですが仕方がないですね。

使い物にならないのなら捨ててしましましょう」

骸が先が三つに分かれた剣を取りだした。フウ太が持っていた剣とは少し違った

柄の長さが体ぐら이었다。先を合わせて骸の身長ぐらいはある

その長い柄を麗の体に向けて横に振る

麗は軽く上に飛ぶと通過した柄の上に乗った

麗「本気を出さないと・・・死ぬわよ」

ゾクッ

寒気！？このオレが・・・

いくつもの戦場を経験してきたオレが寒気を感じるだど！？

しかし、麗のあの目。雪のように冷たい目と殺気

まさかここまでだとは・・・ツナこれは難しいぞ

麗が柄から降りた

骸「そのようですね。できれば発動させたくなかった。僕が持つ戦闘能力スキルのうち

最も醜く最も危険なこの【人間道】を」

そう言った骸は自分の右目をつぶしだした

嫌な音と共に右目からは血が流れ出す

目から手を離し瞼を開けた骸の右目には『五』と書かれていた

骸「見えますか、この闘気オーラが」

リポーン「どす黒い闘気オーラだな」

骸の全身をどす黒い闘気オーラが覆った。麗はその様子を見ても驚くそぶりは見せなかった

麗「骸の本気は結局その程度か・・・」

逆にがっかりしているようにも見えた

骸「そんなことを言えるのも今のうちですよ」

さっきの攻撃の倍の速さで麗へと近づいていく

その動きをみた麗は

麗「“能力”を使うまでもないわね」

そう言つて体をかがませ攻撃をよけると足払いをして骸のバランスを崩した

そしてバランスの崩れた骸の胸にひじ打ちをくらわした

もろにくらった骸は驚きを隠せないままよろよろと後ろへ引いた

口からは血が出ている

骸「これほどまでに・・・」

麗「私を利用したんだからこのままで済むとは思わないでね」

フラフラな骸に容赦ない蹴りがぶち込まれる

1つの蹴りをくらうたび、骸の体がビクンッと跳ねる。そして大量

の血が口から出された

リボン「こいつは命があぶねーな。骨が何本か折れたぞ」

麗「アハハハ！血よ、血！やっぱり楽しいわ」

ツナ「ひどすぎる」

獄寺「あいつが本当にあの雪風麗なのかよ・・・」

みんなが目の前の光景に驚いている

そんな中だった。雲雀だけが表情を変えずに麗へと近づいていった

麗は雲雀に気づかず骸をたたきのめしていた

骸はもう声を出す気力もないようでぐったりとしている

麗「弱くなったわね。昔の骸はまだ強かったと思ったんだけど」

骸「・・・・・・・・」



誰も声を出さなかった。いや、出せなかった

麗を包むなんともいえない空気がそうさせていた

もう、今までの麗とは違う。優しさのかけらもないただ人を傷つけることを楽しんでいるだけのようだ

雲雀「・・・麗」

麗「!?!」

雲雀の接近に気付かなかった麗は声をかけられ少し驚いた

麗「雲雀恭弥じゃないか。少し待っててとிட்டただろう。

もうすぐでゴミのかたづけは終わるから・・・」

バキッ

いきなりトンファーを出した雲雀は麗の横腹に一発かました

少しふらついた麗は顔を痛みで歪ませていた

麗「骨が折れたじゃない」

麗の目つきが変わった

誰かを本気で殺したいようなそんな目つきに

---

side 沢田綱吉

本当にあれが雪風さんなのか!?

ハイパー化したツナのは分かった。麗の殺気は本気だということが

このままでは雲雀さんが危ない

しかし、今へたに手を出せば足手まといになるだけだ

リポーン「なにポーっとしてんだ。今のうちに山本を溶かしてやれ」

ツナ「あ、ああ」

そうだ。今は自分にできることをしよう

額にもっている炎をグローブに移し山本を溶かしていった

獄寺「10代目。これはすべて雪風が？」

ツナ「そうだ」

氷を溶かすと山本は力なく倒れた

まだ全身が冷たかった。早く温かくしないと

ツナ「この部屋じゃ体温を奪われる。移動しないと」

そう言って山本を担いだ

獄寺「10代目はここにいてください。山本はオレが運びます」

ツナ「分かった。山本はまかせた」

獄寺君が山本を担いで出て行こうとしたその時だった

麗「逃がしはしないよ」

雪風さんが気付いた

すぐ追いかけてしようとしたが先へ進めなかった

腕を雲雀に掴まれていたのだ

雲雀「まだこっちは済んでないよ」

麗「うち・・・いいでしょう。あなたから殺りましょう」

雪風さんと雲雀さんが向きあった

これから2人の戦いが始まる

標的32 “麗”の逆襲（後書き）

なんか骸弱すぎ・・・

ツナもあんまり出番ないし

バランス悪っ！！

構成の立て方が下手で申し訳ありません（ー・ー）

次回はかたよらないよう気を付けます！！

### 標的33 恭弥の想い(前書き)

最近風邪気味の音無です(+o+)

そろそろ黒曜編も終わろうとしています(だいぶ原作と変わってきてますが)

これが、バリアー編や未来編につながっていくかも・・・

### 標的33 恭弥の想い

side 沢田綱吉

雪風さんと雲雀さんが戦い始めて15分、どちらも一步も引かない  
壮絶な戦いだ

やられたらやり返す。攻撃をかわされたらすぐに次の攻撃に移る

オレはただ見ていることしかできなかった

骸は意識を失っていて部屋の隅に倒れている

今は戦いを見守ることと骸が起きないかみていることしかできない

そんな自分がいやだ。何かできることはないだろうか？山本とピア  
ンキは獄寺君が見てくれている。あつちは心配ないだろう

麗「いい加減あきらめたら？あなたは私には勝てないわよ」

雲雀「……………」

雪風さんに雲雀さんは答えない

それにカチンと来たのか雪風さんは叫んだ

麗「調子乗ってんじゃないよ！吹雪き」  
フフェーラ・ディ・ネーヴェ

部屋いつたいが吹雪きに包まれる

風と雪で前が見えない。いつたいどうなっているんだ？

麗「人は嫌いだ。だから私は人を殺すことを生きがいとする」

吹雪きが止んだ。視界がだんだんはつきりしてくる

雲雀「確かに麗の言っていることも正しいかもしれない」

ツナ「雲雀さん……？」

雲雀「だけど本当はそう思っていないんじゃないの？」

麗「！！……そんなことが言える立場か。自分の状況がまだ分かってないみたいだね」

ツナ「雲雀さん！！」



雲雀さんの足元は氷で覆われていた

顔や体はトンファーで防いでいたらしく無事だったがトンファーが凍っていた

今の雲雀さんでは攻撃できないうえに身動きが取れない

雲雀「小動物は手を出さないでよ」

麗「つな！この期におよんでまだそんなことを言うか！自分の状況を考えなさい。

身動きが取れないのよ。あなたには何もできないじゃない」

雲雀さんのほほを殴った

雲雀「だからなんだい？君の攻撃は効かないよ」

麗「フツ、そう無理をするな。口が切れているぞ」

雲雀「ねえ、そんなことより僕の質問に答えてくれないかな。

君の言っていることは本心ではないのだろうか？」

バキッ

本気の一発が雲雀さんの顔に直撃する

その後も連続で顔や腹などあちこちにパンチやけりをいれていった

麗「ふざけるな！ふざけるなっ！！」

止まる様子がない

雲雀さんはされるがままになっている

ツナ「止めないと！！」

リボン「待て」

助けに行こうとした俺をリボンが止めた

ツナ「どうして止めるんだ。このままじゃ雲雀さんが・・・」

リボン「雲雀はこんなもんで死ぬ奴じゃねー。あいつが止めようと思えばあのパンチ

を止めれるはずなんだ。そうしねーってことは何か考えがあるんだろう」

ツナ「っく・・・やはりただ見ているだけなのか」

---

side 雲雀恭弥

さつきから麗に何回殴られ、蹴られただろう

確かに一撃一撃が重いが何か迷いがあるように思える

麗「ふざけるな！ふざけるなっ！！」

麗、気付いているか？叫びながら殴るお前の顔が歪んでいるのを

その歪んでいる顔が悲しみからなのか怒りからなのか分からないが  
まあ、楽しさからではないだろう

いつもなら殴られることは気にくわないが麗だから仕方ない

麗にはいろいろ借りを作ってしまったからね。今回だけだ

ここは何もない。光も届かず真っ暗だ

『・・・い・れ・い・・・・麗・・・』

私を呼んでいるのは誰？

誰でもいいや。私には関係ない

『いい加減目を覚ませ』

ん・・・？

私、今誰かを殴ってる・・・？

視界がはつきりしてきた。私が殴っているのは・・・恭弥？

何で恭弥が？私は骸のところに行っただけから・・・

そつだ。私は“麗”に精神を預けてしまった。今の私は暴走してるんだ。でも、今の私ではどうすることもできない

『麗・・・目を覚ますんだ』

さっきから聞こえる声……これってもしかして恭弥？

---

side “麗”

どうして、どうしてなんだ！？雲雀恭弥

殴られてるといっのに体中がポロポロのはずなのにどうして……？

麗「ふんげなるなあ……！……！」

どうしてそんなふうに笑う!?

どうしてそんなに愛おしそうな目でこっちを見る!?

傷つけているのは私だぞ。なのにどうして・・・

『もう・・・やめて・・・』

麗「!?!?」

『やめて』

麗「だまれ!だまれ、だまれ!」

ツナ「いったいどうしたんだ!」

リボン「麗、負けんじゃねーぞ」

叫びだした麗のすきをついて雲雀は氷から抜け出した。そしてトンファーに着いた氷を砕くと麗に抜けて構えた

『もうあなたの好きにはさせない。仲間を傷つけることは許さない』

麗「だまれ!!なにが仲間だ。今まで仲間だと思ってたやつらにさ  
んざん裏切られて

きただろうが!!なのにまだそんなたわごとを!

ツナ「雪風さん・・・」

『今までとは違う。私にもやっと信じられる仲間ができた』

麗「お前も、お前までも私を1人にするのか・・・」

足の力が入らず膝をついた

雲雀「いつたい君は何がしたかったんだい?

人を傷つけることで少しでも傷がいえたことがあった?

ただ君は仲間が欲しかっただけじゃないの?」

麗「うるさい!うるさい!氷の牙」  
ギアッチョ・ディ・ツァンナ

麗の手元に先の鋭い氷の牙ができていく



それを持つと雲雀の元へ駆け出した

雲雀「口で言っても分かんないようだね」

---

side 雲雀恭弥

麗が氷の塊を持って走ってくる

あの氷に当たれば切れ味はすごいかもしれない。でも氷は氷だ

雲雀「もう、手加減はしないよ」

トンファーを構え麗へと向かっていく

最初の一振りで氷の塊を砕き次の一振りで麗の体をはじいた

麗「ぐっは……」

もといたところから20メートルぐらい飛んだ

口から血を出したけど今は関係ない。この程度じゃ死にはしないだろう

雲雀「もう終わりかい？口ほどにもないな。なら早く麗を返してもらおうか」

麗に借りを作ったままいなくなられては困る

まあ、さっきの殴られたことでほとんどチャラだけど

麗「なによさっきから……麗、麗って……」

起き上がり顔を伏せゆっくりとこっちに歩いてくる

麗「そんなこと言つといて裏切るのはあんたたちじゃない・・・  
いつもいつも・・・いったいどれだけあの子が傷ついたと思っ  
てるの!」

ツナ・リボン「!」

顔をあげた麗は目からしずくが落ちていた

泣いていたのだった

麗「また裏切るんでしょ? だったら最初から信じなきやいいのよ。  
仲間だなんてほざいてる奴なんかいなくなればいいのよ!」

そういうことか・・・

麗は人が嫌いなんかじゃない。 <麗> が傷つくことがいやなんだ

そんなこと僕にとってはばかばかしいね

雲雀「僕は<麗>のに興味を持ったんだ。 群れるわけでもなく草食  
動物みたい

でもない。 まあ、いろいろと<麗>は興味深い」

僕もよくわからない。麗に風紀委員の仕事を手伝ってもらおうちに麗がいないと落ち着かなくなった。麗が近くにいることが普通になった

雲雀「だから、麗がく麗くでいてもらわなくては困るんだよ」

突っ立っている麗を再びトンファーではじいた

今度は吹っ飛ばなかったが骨は折れただろう

麗「ぐっ・・・負けるわけにはいかないんだ・・・」

まだそんなことを言ってるのか

何がなんでも麗は返してもらおうよ

再びトンファーを振り上げたそのとき

ツナ「もう、これ以上はやめる」

小動物の声が出た

雲雀「なんだい？手を出さないでって言わなかった？」

ツナ「たとえ雲雀さんが雪風さんを助けようと思っててもこんなやり方で助ける

というのならそうはさせない。もう仲間を、麗を傷つけさせはしない！」

麗「・・・!!!??」

何を言ってるんだい、この小動物は

しかも、何気に麗って呼び捨てにしてるし・・・いつそ先に咬み殺してしまおうか

雲雀「手を出すというのなら先に君を咬み殺すよ」

ツナ「そうすればいいさ。でも麗は傷つけるな」

なまいきだな

本当に咬み殺してしまおう

僕の殺気が小動物へと向けられた時だった

麗「・・・恭弥・・・？」

突然く麗>の声をした

標的33 恭弥の想い(後書き)

さて、雲雀は麗のことどう思っているんでしょうかね？

そしてこの後麗はどうなるのか!？

次回黒曜編完結です(^| ^)ノ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9829s/>

---

謎の転校生は・・・・・・・・

2011年12月11日13時50分発行